令和５年第１６回教育委員会定例会

（８月２３日開会）

台東区教育委員会

○日　　時　　令和５年８月２３日（水）午前１０時００分から午後４時３３分

○場　　所　　台東区役所　１０階　１００２会議室

○出　席　者

教　育　長	佐藤　徳久
教育長職務代理者	髙森　大乗
委　　員	垣内恵美子
委　　員	浦井　祥子
委　　員	神田しげみ

○出　席　者

事務局次長	前田　幹生
庶務課長	横倉　　亨
学務課長	川田　崇彰
児童保育課長	清水　良登
放課後対策担当課長	小野田　登
指導課長	宮脇　　隆
教育改革担当課長 兼教育支援館長	工藤　哲士
生涯学習推進担当部長	三瓶　共洋
生涯学習課長	久木田太郎
スポーツ振興課長	村松　克尚
中央図書館長	大塚美奈子

○日　　程

日程第１　教育長報告

１　協議事項

（１）指導課

ア　令和６年度使用　台東区立小学校教科用図書採択について

イ　令和６年度使用　台東区立特別支援学級教科用図書採択について

日程第２　議案審議

第３５号議案　令和６年度使用　台東区立小学校教科用図書採択について

第３６号議案　令和６年度使用　台東区立特別支援学級教科用図書採択について

２　その他

午前１０時００分　開会

○佐藤教育長　ただいまから、令和５年第１６回台東区教育委員会定例会を開会いたします。

本日の会議録署名委員は、神田委員にお願いいたします。

ここで傍聴について申し上げます。本日、会議の傍聴を希望する方については許可することとしておりますので、ご了承ください。

また、今定例会においては、東京都台東区教育委員会傍聴規則第４条ただし書の規定に基づき、傍聴人が２０名を超える場合であってもこれを許可いたしたいと思います。

また、本日の会議について写真撮影を行いたい旨の申請がありました。つきましては、東京都台東区教育委員会傍聴規則第７条の規定により許可いたしたいと思います。

（傍聴人入室）

（写真撮影）

〈日程第１　教育長報告〉

協議事項

協議事項

（１）指導課　アイ

○佐藤教育長　それでは、日程第１、教育長報告の協議事項を議題といたします。

指導課ア及びイの審議方法につきましては、８月１日の定例会においてご決定いただいておりますが、審議する教科の順番、発行者の推薦方法及び発言の順番について、改めて私から説明を申し上げます。

まず、はじめに、小学校教科用図書採択について審議いたします。審議する教科の順番につきましては、学習指導要領の評価の順番で、１種目ごとに審議、仮決定をしてまいります。

各委員には、推薦する教科用図書の発行者について理由を付して挙げていただきます。挙げていただく発行者については、１者しかない場合は1者、複数ある場合は３者までとし、優先順位をつけていただくようお願いいたします。

次に、発言の順番でございますが、私が指名する委員から時計回りでお願いいたします。

この進め方でよろしいでしょうか。

（異議なし）

○佐藤教育長　それでは、そのように進めさせていただきます。

次に、仮決定についてですが、委員全員からご意見をいただいた後、委員会として採択する１者を仮決定してまいります。小学校教科用図書につきましては、過半数である３人以上の方が第１位に推薦した発行者については、協議をした上で仮決定とさせていただきます。ただし、過半数に満たない場合は、改めて協議をした上で仮決定してまいります。

この進め方でよろしいでしょうか。

（異議なし）

○佐藤教育長　それでは、そのように進めさせていただきます。

次に、特別支援学級教科用図書採択について審議いたします。採択につきましては、年度ごとの子供たちの障害の状況などを考慮して審議及び仮決定してまいります。

この進め方でよろしいでしょうか。

（異議なし）

○佐藤教育長　それでは、そのように進めさせていただきます。

それでは、まず、小学校教科用図書についてご審議を願います。

国語

○佐藤教育長　まず、国語についてご審議願います。発行者は３者となっております。

それでは、各委員から、採択すべき発行者について順位をつけてご発言をお願いいたします。

神田委員から、時計回りの順番でお願いいたします。

○神田委員　現行の学習指導要領の理念を受け、どの教科書も現場で指導しやすいように様々な工夫がなされています。国語科は言語教育という特色をもつ教科ですから、他教科への影響も大きな教科であるとも言えます。

そのような視点から考えますと、まず、教科書を選ぶ観点としましては、①主体的・対話的で深い学びの実現が図られているか②個別最適な学びと主体的な学びの提案があるか③学習過程の流れが明確であるか、またその流れが分かりやすく自学自習を助ける内容であるか④言葉の学びがあり、語彙指導の充実が図れる内容か⑤読み物教材の内容が時代にふさわしいものか、また、読書指導に充実が図れる内容か⑥確かな国語力の定着が図られ、学力の向上が可能かなどの視点から全ての教科書を拝見させていただきました。

私は光村図書と教育出版が優れていると思いました。

光村図書では、学習指導要領のキーワードともなっている「主体的・対話的で深い学び」の視点から、巻頭「国語の学びを見わたそう」が２年生以上に新しく設けられています。「どうやって学んでいくのかな」では、「児童の自発的な問い」を出発点として、「見通しをもつ」→「問いをもつ」→「言語活動」→「ふりかえう」という学習の流れが示されています。児童にとっても「主体的・対話的で深い学び」を確認し、学び方が身に付くように工夫されています。そして、これまで学んできたこと、これから学ぶことが領域別に一目で分かるように示されています。

その他、「言葉の準備運動」「詩を楽しもう」「楽しく書こう」「続けてみよう」などは、リラックスして国語に取り組めたり、帯教材として活用したりすることができます。児童や教師が工夫して国語を楽しみながら主体的に学んだり指導したりすることができると思います。

②の「個別最適な学びと主体的な学びの提案がされているか」と③の学習過程の流れ

が明確であるか、その流れが分かりやすく自学自習を助ける内容であるか、について話します。光村図書では、各単元に「手引き」があり、主体的に学べるようになっています。「手引き」は、「とらえよう」「ふかめよう」「まとめよう」「ひろげよう」の順です。

これは、学習指導要領に示された学習過程を視覚的に示し、児童にも教師にも授業の流れが一目で分かるようになっています。「手引き」は２段構成になっており、下段には「ことばによる見方・考え方」に着目して学習にとりくめるヒントが示されています。

また、それぞれの単元は、「問い」から始まっています。６年生の「やまなし」では、「『５月』と『１２月』を読んで、あなたはどんな印象をもちましたか。二つの場合の印象の違いはどこから生まれるのでしょうか。」という問いが投げかけられています。どの単元もこのような問いから始まり、意欲的に追究することができるようになっています。児童一人一人が自分なりの課題意識をもつことができます。「ふりかえろう」で「しる」「よむ（かく）」「つなぐ」の３観点から振り返ります。まとめて終わるのではなく、これからの学習へ「つなぎ」、「確かな国語力の定着」を図っています。

目標が２段階になっています。上段には端的に示した学習目標を、下段には児童にも分かる言葉で指導事項が示されています。

④の言葉の学びがあること、語彙指導の充実が図れる内容かについてです。巻末には「言葉の宝箱」があり、語彙を増やし、選択肢を広げることができます。また、これまで学んだ言葉がQRコードに収録してあるので活用することもできます。その他、「伝え合うための言葉」「学習に用いる言葉」なども活用することができます。

⑤の読み物教材の内容が時代にふさわしいものか、また、読書指導に充実が図れる内容かについてです。時代を超えて読み継ぎたい作品「おおきなかぶ」「スイミー」「ちいちゃんのかげおくり」「やまなし」など。また、現代の児童に伝えたいことを盛り込んだ新規の作品も掲載されています。読書によって生活を豊かにするための魅力ある教材が多く掲載されています。

⑥の「確かな国語力の定着が図られ、学力の向上が可能か」についてです。巻頭では前学年で学んだことが整理されています。また、単元の扉には、「これまでの学習」が示されています。単元ごとに「たいせつ」があり、この単元で身に付けるべき言葉の力がまとめられています。巻末には「たいせつ」のまとめもあり、既習事項を意識し、習得させることができるようになっています。

その他にも、タブレットの活用を意識した工夫が見られ、QRコードの内容も動画が多く、充実しています。話し方のモデルなどは実際の授業で活用できると思いました。

教育出版では、扉に目標や問いが設定されています。単元の終わりには、学習過程が「たしかめよう→くわしくよもう→まとめよう→伝えあおう」の順に示されています。下段には手引きのヒントがあり、授業に活用しやすいです。「言葉」「言葉を増やそう」などで、語彙指導の充実が図られると思います。例示も多く掲載されており、活用できます。「ここが大事」で、単元で身に付けるべき力が示され、どのように活用すべきかを意識さ

れています。掲載されている作品や教材は、定番のものと新しい教材がバランスよく配置されています。デジタル指導書が作成されているのも指導者には魅力的です。カラーユニバーサルデザインに配慮がされ、人に優しい色づかいなども評価されます。

どちらも評価される点が多いのですが、総合的に考えて、私は、第１位に光村図書を、第２位に教育出版を推したいと思います。

以上です。

○佐藤教育長　ありがとうございました。

浦井委員、お願いします。

○浦井委員　よろしくお願いします。まず、全教科共通しての、私の基本的なスタンスを簡単にお話しさせていただいてから、国語について触れたいと思います。今回この教科書採択にあたって私が重視いたしましたのは、「教わる児童にとってわかりやすく、かつ教える側も教えやすいこと」です。そのうえで、「児童にとって負担にならない程度の重さや、使いやすい形状であること」「子供たちが興味を持って学べる工夫がされていること」また、教科によっては「子どもが教員の解説なしに、一人で教科書を読んでもしっかり理解ができること」などを加えて考えました。

教育課程の中でも、特に小学校は、１年生から６年生という長く大きな成長の幅があります。それぞれの教科において、その成長過程に応じた内容や構成を考えるのは、大変難しいことではありますが、学ぶ側にも教える側にも、非常に大切なことです。「わかりやすさ」という意味で、そういった発達段階への考慮も重視いたしました。

さて、そのうえで、国語の教科書についてお話しさせていただきます。私は、第１位を光村図書、第２位を教育出版とさせていただきました。

相手の言葉から正確に思いを読み取るには、「国語力」が欠かせません。「国語力」がないと、自分の思いが伝わらず、うまく言葉にできずに力で解決しようとしたり、相手の言葉の意味を勘違いして、要らぬ争いを引き起こしたりしかねません。また、学習面でも、算数や理科など、すべての教科で、言葉の意味を読み取る「国語力」が必要なことは、言うまでもありません。

小学生６年間で、子どもの読み書きの力はすさまじい勢いで発達します。ひらがなの単語しか読み書きできなかった子どもが、難解な説明文まで理解するようになっていきます。そして、中学以降に向けて、さらに継続した成長を促さなくてはなりません。したがって、国語の教科書には、お手本となる幅広いタイプの文章やそれを読み解くための工夫、そして、正しい文字が必要だと思います。

光村図書は、まず本文の書体に、書き文字との差異が少ないものを用いている点で、子供たちにとっては混乱もなく文字を覚えられ、良いのではないかと考えました。

また、光村図書は、各単元のまとめがわかりやすく、学ぶ側である子どもが自分で主体的な学習のまとめをしやすくなっており、同時に教える側にとっても使いやすいのではないかと思いました。５・６年が上下巻に分かれておらず、少々重い点が気になりましたが、

学習の見通しが持てるという点では有意義であると考えます。書くことの単元でも、手本の文を複数示すなど、書く力をつける導きもうまくなされているのではないかと思います。

教育出版も、書くことの単元における例文が全文示されており、これは文章を作るのが苦手な子どもにとって、構成や流れを把握する良い見本になるのではないかと感じました。

台東区は学力調査の結果、全体的に力は高いものの、中では読む力が弱いとのことで、そこを補うには、光村図書、教育出版ともに説明的な文章と文学的な文章をバランスよく取り上げており、その点でも、両者は適切であると考えます。

したがって、１位を光村図書、２位を教育出版とさせていただきました。以上です。

〇佐藤教育長　ありがとうございました。

垣内委員、よろしくお願いします。

〇垣内委員　よろしくお願いいたします。

私は、教科書の採択の確認をする際に、まず最初に学習指導要領の目標、それと併せて本区の状況、そして子供の主体的な学びと、それから小学校の場合は必ずしも専門ではない教員の方もいらっしゃると聞いておりますので、そういう方々でも教えやすい構造的な構成をもって作成されているというところも重視させていただきました。もちろん学習の流れとか目的とか目当てといったようなこともそうですけれども、内容、それから情報提供のやり方、その他も含めて総合的に勘案しております。

その上で、国語につきましては、ほかの委員の方々もご指摘されましたように、言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通じて国語で正確に理解し適切に表現する資質、能力という非常に幅広い、深い能力を育成して、そしてほかの教科にも大きな波及があるということでございますので、非常に重要な教科だというふうに思っております。その中では、正確に理解する、適切に表現する、そしてこの言語活動を通して伝え合う、あるいは思考力や想像力を自主的に養っていくということが非常に重要であろうと思っております。

今回の教科書に関しましては３者いずれも非常によくできておりまして、目的意識を明確に持ちながら主体的に学ぶことができるんじゃないかというふうに思いました。内容面につきましても、また教材の配分などについても、非常によく工夫されていると思いました。その上で、より丁寧で、かつ楽しく学べるという観点から、私は、第１位を光村図書、そして第２位は東京書籍とさせていただいております。

なぜ光村図書かというと、先ほども指摘がありましたように、本区の学力テストの中では、やはり読むことというのが非常に重要である、また、読むことによってこの言語能力のさらなる発展というのが望めるということもございます。光村図書、そして東京書籍も、この読むことに関する文種別作品数も十分ありますので両者なかなか優劣がつけ難いところなんですけれども、光村図書に関して言うと、内容を理解するための絵や図、写真等がいずれもふんだんに用いられていて、また、各単元ごとに「たいせつ」のページが設定さ

れており、学習者が主体的に学習のまとめができるという点を高く評価しました。光村図書、東京書籍、いずれも優れた教科書であると思いますけれども、第１位が光村図書、第２位が東京書籍ということになります。

以上です。

○佐藤教育長　ありがとうございました。

髙森委員、お願いします。

○髙森委員　私は、今回の教科用図書の選定に当たっては、主として東京都教育委員会ならびに台東区教育委員会の調査研究委員会の分析結果報告を参照しつつ、これに個人的な選定・評価の視点を加味して、発行者の教科用図書を比較・検討いたしました。

具体的に申し上げますと、１点目の視点は、教科の概論に相当する部分について、当該教科を学ぶ意義が明確に示されているかどうか、書写や地図の場合に限っては教材の活用法が具体的に示されているかどうか、といった視点です。

２点目の視点は、各教科に共通する項目について比較するもので、目次・索引・付録・注記などの利便性はどうか、学習の方法論やアプローチ法の提示は的確に示されているか、設問・導入・振り返り・まとめ等の内容は妥当か、発展学習や持ち帰り学習の効果は期待できるか否か、といったような視点です。

３点目の視点は、各教科固有の学習領域・学習内容に関して、適切な教材・コンテンツが有効的に活用されているか否か、といった視点です。

こうした観点にもとづき、各者の教科用図書を多角的に比較・検討しましたので、本委員会では、各教科について、選定・評価の視点と、選考の結果ならびにその理由について述べていきます。

まず、教科「国語科」種目「国語」について、評価の視点、ならびに選定の結果と理由を述べます。

国語科では、全部で３つの視点から比較しました。第１に、各学年の冒頭、上下分冊の場合は上巻の導入部で国語科の学びについてどのように説明されているかについて比べました。これは、編集者側の国語科に対する認識を知る上で大切であると考えたからです。その上で、各領域の分量・配分に着眼して、「聞く」「話す」「読む」「書く」という学習領域ごとの単元数・教材数のバランスが適切かどうか、それぞれの領域が一連の言語活動の中に系統立てて配置されているかどうかなどについて比較しました。

第２に、基礎・基本の定着という観点から、学習者の知能や発達段階に応じた適切な教材が選ばれているかどうか、基本的なポイントをおさえるコーナーが充実しているかどうか、活動の中にアクティブラーニングを意識した主体的・対話的・深い学びが確立されているかどうか、などに着目いたしました。

第３に、付録的要素の充実度について、言語活動の発展的学習や文法・慣用句・敬語などを活用した多様な表現法の学習、既習漢字・新出漢字の字典類、文学作品であればその作品の解題や成立の背景についての説明、教材に関連した文献紹介などのコンテンツが充

実しているかどうかに着目し、各者を比較いたしました。これらの分析を通して、私は、１位に光村図書、２位に教育出版を推薦いたします。

まず、第１の視点である導入部の比較ですが、両者とも第１学年を除く全ての学年で、教科書の各学年の冒頭において、教科の学びについて触れています。このうち光村図書では、「国語の学びを見わたそう」の特設ページが用意され、はじめに「どうやって学んでいくのかな」の見開きページにおいて、思いや考えを話し合って学びを深めていくという学習の進め方がまとめられている点がすぐれています。日頃の学習や生活の中で課題となっていることを見いだし、それに対して目標や問いを構え、国語科の活動を通して学びを深め、そこで得た知見を振り返って、これからの学習や生活にフィードバックしていくという一連の流れの中に国語科の学びを位置づけているのです。これは、国語科という教科を学ぶ意義づけにもなる部分だと思うのと同時に、国語科に限らず様々な教科を学ぶ上での大切な態度でもあると考えます。この態度を土台にして、次に「五年生で学ぶこと」「六年生でまなぶこと」といったページが展開し、「話す」「聞く」「書く」「読む」の各領域に割り振られた学習活動が、各単元とどのように関連づけられているかが示されると同時に、前の学年の既習事項の対応も分かるように工夫されています。

一方、教育出版では、目次につづけて、「５年生で学ぶこと」「６年生で学ぶこと」が用意され、「話す」「聞く」「書く」「読む」の活動と当該学年で学ぶ単元の道のりが示されて、一年間の学習の内容を筋道たてて見通せるようになっていますが、前の学年の既習事項との関連づけはなく、更には光村図書のような教科を学ぶ態度や学びを活かす視点については触れられていません。「なぜ国語科を学ぶのか」という動機付けがあるほうが、学習者の意識が高まると考えますので、この部分は光村図書を評価したいと思います。

第２の視点である教材や活動の内容について、光村図書は、具体的発問と抽象的発問が混在していて、学習者の気づきを促したり、深く考える部分につながる工夫がとられているようです。一方、教育出版は、具体的な発問が多く、ターゲットとしている児童の学力の水準も概ね低めに設定され、児童の習熟度にも柔軟に対応できる内容になっているのではないかと思われます。

具体的な学習活動について一例を挙げて比較してみたいと思いますが、比較の際には、各者において共通に用いられる教材を対象にするとよいと考えます。そこで、４年生で学習する「ごんぎつね」の教材で、いまの２社の内容を比較しますと、光村図書４年下巻３２～３５ページ、教育出版４年下巻２６～２９ページをご覧いただければお分かりのように、光村図書は「見通しをもとう」「とらえよう」「ふかめよう」「まとめよう」「ひろげよう」「ふりかえろう」の６段階で、教育出版は、「たしかめよう」「くわしくよもう」「まとめよう」「つたえあおう」の４段階で、それぞれ学習を深め、広げていく工夫がとられており、児童も段階を追って学習活動に取り組むことができるようになっています。また、２社とも、それぞれに１～２点の課題が提示されており、授業の進行にあたっては無理のない構成になっているように見受けられます。

ただし、その中身について具体的に見ていくと、教育出版の場合、２６・２７ページ下段に４つの活動に呼応するかたちで学習者の対話形式による考え方のヒントが示されていますが、話し合いや考え方を意図的に誘導するかたちになっているため、活動は円滑に進むかも知れませんが、柔軟な発想にもとづくアクティブな意見交換には向いていない気がします。一方、光村図書の場合、３２・３３ページ下段に同様に各活動に呼応したヒントが示されておりますが、こちらは、考えたり、まとめたり、話し合ったりするための事例が示されるだけで、学習活動の自由度はかなり高くなっているようです。授業を円滑に進めると同時に、アクティブな活動を重視していることが読み取れます。

いまは一例のみを挙げましたが、この単元に限らず、ほぼすべての教材において、光村図書のほうが授業を進めやすい工夫と、主体的・対話的・深い学びを通して気づきを促す学習の確立がはかられていると思われます。

第３の視点である付録類の充実度について、２者ともに第２学年以降は各学年とも首尾一貫して、新出漢字の字典、文法事項の学習、語彙の拡充に資する教材、学習用語の解説、図書館活用や推薦図書の紹介など必要な内容は概ね満たされているようです。付録に取り上げる項目もほぼ同じで、光村図書は、「伝え合うための言葉」のページで話し合い活動の中で用いる常套句が、「学習に用いる言葉」のページで国語科特有の専門用語の解説が、「言葉のたから箱」のページで「人物」「事物」「心情」を表現する語彙が、「図を使って考えよう」のページでは考えを整理したり広げたりする際のチャートや表の活用例が示され、一方の教育出版は、「言葉の道具箱」で考えをまとめ表現する際に役立つツールが、「言葉の木」のページに表現を広げるための語彙が、「学ぶときに使う言葉」のページに国語科用語の解説が、「情報のまとめ」のページに情報を整理し分析するための具体的手法が、「大切な言い方を確かめよう」のページに自分の意見を表現する際に役立つ言い方が、それぞれ整理されています。両者とも付録はおのおの特徴がでている部分であると思いますので、優劣はつけがたいです。

付録的要素という面でもうひとつ、教材に用いられた文学作品の作者や作品成立の背景に関する説明に着目して比較をしてみたいと思います。光村図書の第６学年１１２ページ以降の「やまなし」と、教育出版の第５学年下巻３６ページ以降の「雪わたり」は、いずれも宮沢賢治の作品のうち擬音語・擬声語・擬態語などの独特な音象徴語オノマトペが多用されることで知られる作品となりますが、両者を比較してみますと、光村図書は、１２３ページから９ページもの分量を割いて「［資料］イーハトーヴの夢」のコラムが用意され、宮沢賢治の生涯や、数多くの児童文学作品が生まれた背景について説明されています。作品を単なる教材として学ぶのではなく、作者の思いにまで触れることでより深く学習するという意味では、大きな効果があると考えます。

一方の教育出版は、宮沢賢治の他の作品紹介はあっても、詳しい人物像紹介までは付随していません。なお、第６学年巻末の付録「楽しく読もう」には、唐突に正岡子規が紹介されていますが、該当する子規の作品は、教科の活動の中に位置づけられていないようで

す。あるとすれば俳句の活動になるのだとは思いますが、なぜか俳句は前の学年５年生下巻に割り当てられています。

以上の分析にもとづき、限られた時間内で無理なく全員が取り組めるという内容面、主体的・対話的・深い学びが有効に成立するという機能面に力点がおかれているという点で、私は光村図書を第１位に、第２位を教育出版の順で順位づけしたいと思います。

〇佐藤教育長　ありがとうございました。

それでは、私からでございます。私は、今回の教科書図書の選定に当たりまして、都の教科書調査研究資料や区の調査研究委員会からの教科用図書の調査研究の結果についての報告を参照しながら各者を比較し、選定したところでございます。

国語科は、人との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や判断力を養うことや、国語の大切さを自覚し、国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養うことが重要な教科であると認識しております。

発行者3者とも学習指導要領に基づいた適正な内容となっておりますが、例えば、読むことについて言えば、文種別作品数を比較しても、数には多少の違いはあるにせよ、どの発行者も順序やバランスよく教材が配置されているところでございます。

挿絵につきましては、特に低学年は理解に大きく関与してまいります。東京書籍と光村図書は、内容の理解を促すための絵や図や写真などがふんだんに用いられております。教育出版は、全体的に絵や図、写真などは、やや小さく掲載されておりますが、分かりやすくなっていると感じました。

また、読書へのつながりなど、主体的な学びをできるように見通しを持てる構成になっているかの視点で比較すると、教育出版は、目的意識を明確に持ちやすく、見通しを持って学び進められるように工夫されております。光村図書は、各単元に「たいせつ」のページが設定されており、単元における学習事項がまとめられているため、他の委員もおっしゃいましたとおり、学習者が主体的に学習のまとめをできるようになっていると考えました。

以上のことから、私は、１位、光村図書、２位、教育出版を推薦させていただきます。

ただいま各委員から推薦する発行者についてのご発言をいただきましたが、集計した結果について事務局に報告をさせます。

〇事務局　それでは、ただいまの集計結果について申し上げます。

１位に光村図書を推薦された方が５名、第２位に東京書籍を推薦された方が１名、教育出版を推薦された方が４名。

以上でございます。

〇佐藤教育長　ただいまの集計結果のとおり、１位に光村図書を挙げた方の数が５名と最も多く、過半数を超えております。このことにより、国語については光村図書に仮決定させていただきたいと思いますが、このことについて附帯意見等はございますでしょうか。

（なし）

○佐藤教育長　それでは、国語については光村図書に仮決定させていただきたいと思いますが、これにご異議ございませんか。

（異議なし）

○佐藤教育長　ご異議ございませんので、国語については光村図書に仮決定いたしました。

書写

○佐藤教育長　続いて、書写についてご審議願います。発行者は3者となっております。

それでは、各委員から、採択すべき発行者について順位をつけてご発言をお願いいたします。

浦井委員から、時計回りの順番でお願いいたします。

○浦井委員　私は、第１位を光村図書、第２位を東京書籍とさせていただきました。

書写は、もちろん伝統的な大切さもありますが、早くノートを取る、早く答えを書くなど、時間に追われて字が荒れていきがちな中で、改めて落ち着いて「字」そのものに向き合い、美しい文字を書くことだけに集中できる貴重な機会ではないかと思います。また、文字そのものへの興味や関心を持たせ、日本語への興味を促すこともできる教科ではないかと思います。

とはいえ、なかなか筆を持つ機会も少なくなり、子どもたちの中には最初、筆を持つ大人の姿を見たこともないという子もいるだろうと考えまして、書写の姿勢や運筆などに、丁寧で分かりやすい写真や参考となる動画がある、そして左利きへの配慮があることなどを重視しました。

そのうえでまず、光村図書・東京書籍の両者につきましては、左利きへの配慮がなされている点が良いと感じました。

さらに、姿勢や運筆については、どの発行者も写真などを添えて、わかりやすいよう工夫されておりましたが、東京書籍につきましては、これは教育出版も同様ですが、書き順の色分けを教室のチョークの色とそろえるなど、教えやすくわかりやすい工夫がしてあると感じました。

光村図書は、取り上げられている文字の数などは少ないですが、逆に必要最小限のものにしぼりこんであり、必要があればより発展的に活用できるよう、多数の例をまとめて示したページが設けられているなど、教える側のスキルの有無によらず使いやすいのではないかと考えました。そういう意味では、東京書籍は用例数が多く、美しい文字や書き方を多く目にできる反面、内容的に1年間でこなすには少々負担が大きいようにも思いました。

また、光村図書は、「毛筆スタートブック」にも毛筆の使い方が分かりやすく示されている点。目次が見やすく学習の進み方が把握しやすい点。１年の教科書の最初と最後に自分の名前を書かせて比べられるようにするなど、子どもたちが自分の成長を感じられる

工夫がある点。そして、学習したことをどのように他の教科などで活かせるのか子どもたちが実感できるように、多くの例が示されており、先ほども少し触れましたが必要があれば活用していけるようになっている点なども良いのではないかと感じました。

東京書籍は、学ぶ文字の近くにあえて絵を入れないことで、視界を邪魔しない工夫などが良いと感じました。

このような点を総合的に判断いたしまして、私といたしましては、第１位を光村図書、第２位を東京書籍とさせていただきました。以上です。

○佐藤教育長　ありがとうございます。

垣内委員、お願いします。

○垣内委員　書写につきましても、学習指導要領、それから東京都並びに台東区の調査研究委員会の報告を踏まえて検討させていただきました。

書写は、各教科の学習活動や日常生活に生かすことができる能力を育成する非常に重要なものでもありますし、小学校３年から始まる書道につきましては、近年、無形文化財としても登録されるようになりました。こういった日本の伝統文化をきちんと次代に継承するという観点からも、非常に重要な科目であるというふうに思っております。したがいまして、文字を正しく整えて書くということだけではなくて、この学習で身につけた資質、能力をほかの教科・学習や生活の様々なところに積極的に生かす態度、姿勢というんでしょうか、これを育成するということも非常に重要ではないかというふうに思っております。

１点目に、文字を正しく書くということがまず非常に重要なポイントになります。これにつきましては、３者とも、姿勢とか用具の持ち方、使い方、全画の書き方、文字の組立方、それから目的に応じて使用する筆記用具を選ぶこと、その特徴を生かして書くことといったような点、いずれも非常に工夫されているというふうに思っております。これによって、国語の授業とか日々の生活の中で関連を持ってこの能力を使っていくことができるというふうに思いました。

あわせて、デジタルコンテンツにつきましても３者とも２次元コードを採用して、学習の参考となる動画、情報などをクラウド上にも準備しているということがあります。書くというのは動作ですので、こういう動画というのは非常に重要な要素になるかなというふうに思っております。

いずれもよく工夫されているわけですけれども、最初に申しましたように、本区の状況、それから必ずしも専門ではない先生方が教える、そしてまた児童が主体的に学んでそれを発展させていくという観点から言うと、第１位が光村図書、第２位、東京書籍というふうに考えております。

光村図書におきましては、学習したことが特にほかの教科で生かせるような多くの事例を示しているページがありまして、発展的に活用できるというふうに考えております。考えよう、確かめよう、生かそうという形で学習を進め、そして内容面でも適切な分量ではないかというふうにも感じました。

以上、第１位が光村図書、第２位が東京書籍でございます。

以上です。

○佐藤教育長　ありがとうございました。

高森委員、お願いします。

○高森委員　教科「国語科」種目「書写」では、教材の活用法の提示、発達段階への配慮、基礎学習・発展学習のバランス、点画・筆順・字形・旁偏・書体の学習、自由度・応用編の充実、既習事項のおさらい等といった点に着目して、比較・検討を行いました。以上の視点から比較・検討した結果、私は、１位に東京書籍、２位に光村図書を推薦いたします。

まず、各学年の導入部分について、２者ともに第１学年のみ目次が表３に配置されていますが、第２学年以降はいずれも巻頭の表２と扉の見返し部分に目次が用意され、書写学習の進め方、単元のめあてなどが説明され、年間を通した目標を確認することができます。この部分においては、東京書籍は第３学年以上の表２右端に「書写の学び」が用意され、目次のアイコンとの関連性も判りやすく構成されており、光村図書よりも瞭然としています。

また、２者ともに、冒頭のかなりのページ数を割いて、書写の姿勢、筆記具の扱い、用具の後始末など書写に臨む際の注意点が詳述されています。

第１学年の硬筆の導入部分では、左利きの鉛筆の持ち方について、東京書籍では４・５ページの見開き、光村図書では７ページの上段に説明がありますが、見やすさと言い、情報量と言い、この部分も、東京書籍のほうが優れています。

第３学年から始まる毛筆に関しても、２者ともに第４学年の冒頭で送筆や筆圧などの既習事項の振り返りがなされていますが、東京書籍の６・７ページ、光村図書の８・９ページを比較すると、東京書籍のほうが運筆の途中の穂先の向きや筆圧までもが詳しく表現されている点が優れています。また、東京書籍は、第４・５・６学年に同様のコンテンツが用意されていますが、光村図書は４学年のみで、第５・６学年にはありません。この点も、東京書籍のほうが丁寧な作りになっております。

中心となる書写の学習内容については、概ね両者ともほぼ同程度の内容で優劣をつけがたいのですが、なによりも東京書籍が秀逸なのは、第２学年以降は必ず巻末に、第１学年から当該学年までに学習することのまとめが、「書写のかぎ」として用意されていることです。一方、光村図書は、巻末には当該学年のみの既習事項のまとめしか掲載されておらず、第１学年からの学習の継続性を再確認することができません。

以上の視点から比較・検討した結果、私は１位に東京書籍、２位に光村図書を推薦いたします。

○佐藤教育長　私は、書写は、文字を正しく整えて書くことができるようにすることに加えまして、書写の学習で身につけた資質、能力を各教科などの学習や生活の様々な場面で積極的に生かす態度を育成することが重要だと考えております。３者とも、姿勢、用具の持ち方、使い方、点画の書き方、文字の組立方、目的に応じて使用する筆記具を選び、そ

の特徴を生かして書くことを取り上げるなど、国語の授業や児童の日常の生活と関連を持つために配慮されているなと感じました。

また、３者とも２次元コードを採用し、学習の参考となる動画や情報をクラウド上に用意されており、学習者が自分で学習を進められるように工夫されております。

その中でも、光村図書につきましては、第3学年のはじめに、他の委員がおっしゃったように「毛筆スタートブック」があり、他者でも同様の記載がございますが、一番大切なことが分かりやすくまとめてあるなと思いました。

また、表紙をめくると目次が出てくることで学習の流れを把握しやすく、高学年と言われる第５・第６学年では目次のページに学年のめあての記載があり、見通しを持ちやすくなっております。さらに、時間ごとに学習の進め方、ねらいが教科書の右下に記載されており、主体的に学習に取り組むことができます。加えて、お手本が左のページに掲載されていることで、板書と同じ流れで学習を進めることができるなど工夫が見られました。

以上のことから、私は、１位に光村図書のみを推薦させていただきます。

以上です。

神田委員、よろしくお願いいたします。

〇神田委員　書写指導については、学習指導要領で「文字を正しく整えて書くことができるようにすることに加えて、書写の学習で身に付けた資質・能力を、各教科等の学習や生活の様々な場面で積極的に生かす態度を育成すること」が求められています。硬筆が各学年で、毛筆は第３学年以上で指導を行うことになっています。「毛筆を使用する書写の指導は硬筆による書写の能力の基礎を養うよう指導する」と、毛筆指導のねらいを明確にしています。このような視点で教科書を検討させていただきました。

どの教科書も優れているのですが、検討した結果、私は１位を光村図書に推したいと思います。

３年生以上の各学年に「学習の進め方」があり。「何をどう学ぶか」が示されています。学習のねらいや見通しをもつことができ、児童が主体的に学ぶことができます。「考えよう」「たしかめよう」「生かそう」の流れで学習が進みます。「生かそう」では毛筆で学んだことを硬筆で書いてみるようになっています。見開きの紙面には右側に文字の書き方の原則が書かれ、左側にはお手本の文字が大きく載せられています。

また、書写学習が始まる第１学年、毛筆学習が始まる第３学年には「スタートブック」があり、書写を学ぶ意義や楽しさなどを感じながら学びがスタートするように工夫されています。

第２学年以上には、巻末には「たいせつ」が設けられ、学習のまとめを行うことができます。身に付けた力を確かめ、今後の学びに生かしていくことができます。学びが深まる動画コンテンツも多く収録されています。

本教科書では、国語の教科書で学んだ漢字を書写でも直ぐに学べるように工夫されているので、児童や教師が使いやすいと考えます。

その他、第６学年では、「書写ブック」が設けられており、６年間で学んだ内容を整理してまとめています。原稿用紙の使い方や葉書や手紙など日常生活で活用する内容や中学校へのつながりを意識した内容などは、活用できます。

各学年、「SDGs」を意識した教材が取り上げられています。第４学年では、「SDGs」があり、道具を最後まで使うことなど、書写の学習における３Sの例が示されています。

第２位は、教育出版を推します。

書写指導のめあてが示されるとともに、学習の進め方が提示されています。「試し書き」→「書く」→「生かそう」（硬筆に生かす）→「振り返ろう」といった学習の流れが明確で、毛筆で学んだことを硬筆でも生かしていくことを意識した構成になっています。教材の数や内容が豊富で教員が選んで指導できると思いました。硬筆、毛筆のお手本の書体が形よく美しいです。３者の教科書を比較しても教育出版のモデルの児童の姿勢は一番素晴らしいです。そのほか用具の使い方などが冒頭にありますが、写真や説明が分かりやすいです。

以上です。

○佐藤教育長　ありがとうございました。

ただいま各委員から推薦する発行者についてご発言をいただきましたが、集計した結果について事務局に報告をさせます。

○事務局　それでは、ただいまの集計結果について申し上げます。

第１位に東京書籍を推薦された方が１名、光村図書を推薦された方が４名、第２位に東京書籍を推薦された方が２名、教育出版を推薦された方が１名、光村図書を推薦された方が１名。

以上でございます。

○佐藤教育長　ただいまの集計結果のとおり、１位に光村図書を挙げた方の数が4名と最も多く、過半数を超えております。このことにより、書写については光村図書に仮決定させていただきたいと思いますが、このことにつきまして附帯意見等はございますでしょうか。

（なし）

○佐藤教育長　それでは、書写については光村図書に仮決定させていただきたいと思いますが、これにご異議ございませんか。

（異議なし）

○佐藤教育長　ご異議ございませんので、書写については光村図書に仮決定いたしました。

社会

○佐藤教育長　続きまして、社会についてご審議願います。発行者は３者となっております。

それでは、各委員から、採択すべき発行者について順位をつけてご発言願います。

垣内委員から、時計回りの順番でお願いいたします。

○垣内委員　社会科の学習指導要領の目標からは、社会的な見方、考え方を働かせ、課題を追求したり解決したりする活動を通して、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質、能力の基礎を養うということになっております。主体的に生きるということ、それから課題を追求したり解決したりするという点に着目したいと思います。

具体的に言いますと、地域や国土の地理的環境、現代社会の仕組みや動き、地域や我が国の歴史や伝統と文化を通して社会生活について理解するということと、それから情報を適切に調べ、まとめる技術・技能ということになろうかと思います。特にこの技能に関しましては、社会的事象の特色や相互の関係、意味を多角的に考えたり、社会に見られる課題を把握して、その解決に向けた社会への関わり方というものを選択、判断したりする力、そして考えたことや選択、判断したことを適切に表現する力というようなことの育成が要請されているというふうに思います。

この観点から具体的に教科書を見ていくわけですけれども、二つの点に着目しました。一つは、児童自身が、学習する子供たちが、学習過程を理解し、そして主体的に学習を進められるかどうかという点です。２点目は、近年、やはり非常にグローバル化した中で情報化が急速に進展しています。こういった情報に係る、特に産業の近年の発展、それから情報を生かして発展するということが国民生活にどういう役割を果たすかという点について着目して拝見いたしました。

いずれの教科書も非常によくできておりまして、学習に当たっても構造化がなされております。例えば使うとか、調べるとか、まとめるといったような学習のそれぞれの段階について非常に見やすく提示されていて、主体的な学習につながるのではないかというふうに思いました。

また、写真や資料を含めて内容も十分です。SDGsとの関連も意識され、そして情報についてもきちんとしっかりと明示されているというふうに思いました。

内容面ではなかなか優劣がつけ難いところなんですけれども、先ほどの主体的な学びという点で、私は、第１位が東京書籍、第２位に日本文教出版を推したいと思います。

それぞれ、特に構造化の中で学習過程が捉えやすくなっている。これによって主体的な学習が非常に進むのではないかということもありますし、情報に関しても十分な過不足ない情報が教科書の中に含まれています。

ただ、東京書籍については、まとめ方のページがあって、これは子供たちにとっても、また教える側の教員の方にとっても、非常に親切で丁寧な教科書づくりではないかというふうに考えられました。

以上の観点から、第１位が東京書籍、第２位が日本文教出版とさせていただきます。

以上です。

○佐藤教育長　ありがとうございました。

髙森委員、お願いいたします。

○髙森委員　教科「社会科」種目「社会」の教科用図書の選定・評価では、まず総合的な観点から、各分野を学習する上でのアプローチの方法、すなわち学習を見通し、調べ、まとめ、活用し、深めていくといった課程を重視した問題解決型学習が取り入れられているかどうか、同時に基礎・基本の知識の定着がはかられているかどうかなどに視点を置き、比較・検討いたしました。

また、個別的観点からは、地理における領土に関する記述、歴史における戦争に関する記述、公民における人権・自衛隊に関する記述、情報リテラシーの記述などに特に注意しながら、文章表現に誤解・偏見を抱かせる心配がないかなど慎重に分析いたしました。

これらの分析を通して、私は、１位に東京書籍、２位に教育出版を推薦いたします。

導入部分のオリエンテーションについて両者を比較すると、東京書籍では、第３学年の４ページに低学年の生活科での既習事項、４年生以降はいずれも４ページに前の学年の既習事項について、振り返りのページが用意され、また全学年ともに５ページに当該学年での学習事項の案内があり、学習の繋がりや深まりを把握できる特徴があります。学習の方法・態度などの基本的事柄については、巻頭ではなく、各単元毎に用意された「学習の進め方」において、「つかむ」「調べる」「まとめる」「いかす」の４ステップで個々の学びの基本が示され、更に学びのポイントとなる「社会科の見方・考え方」が説明されている点が評価できます。また、本編の随所に「まなび方コーナー」が用意され、「見る・聞く・ふれる」「読み取る」「表す・伝える」の３つカテゴリーに整理して、学びに必要なスキルの開発に力を注いでいことが分かります。

一方、教育出版では、全学年２～７ページに亘って、「社会科の学習を広げる」「前の学年を振り返ろう」「社会科で使う見方・考え方」「社会科の進め方」が用意され、学びの視点や態度が一様に示されているという特徴があります。また他教科との関わりについても触れ、教科横断的な広がりを把握しつつ社会科を学ぶ意義を学習できる工夫がなされています。

各単元の学習の進め方について、両者を比較すると、東京書籍は登場人物の話し合いパートと、知識として学習すべき内容とが明確に分かれている一方で、教育出版はそれらが折り重なるような構成になっており、アクティブラーニングを意識した構成になっているようです。ここは、賛否が分かれるところだと思いますが、個人的には、東京書籍のように活動と学習が明確に線引きされていたほうが、授業に抑揚・メリハリがつくような気がします。

次に個別の内容について、少しく見て参ります。まず、地理分野の領土を巡る記述については、東京書籍は第５学年上巻の１２～１５ページに、教育出版は第５学年の１４～１８ページに４ページに亘って詳細に触れられています。更に歴史分野でも、東京書籍は６年歴史篇の１５３ページに、教育出版は第６学年２３０・２３１ページでも再度このことに触れ、課題意識の強さを読み取れます。文面の大きな違いは、東京書籍は事実関係の記

述にとどまるのに対して、教育出版は、課題の平和的解決に向けて努力を継続する必要性を説くなど、より具体的解決策が示されている点が特徴的です。

次に、歴史分野の近代の戦争に関する記述については、たとえば、第二次世界大戦の戦時下の国民の生活については、東京書籍の１２８ページ以降、教育出版の２１０ページ以降において多くの紙面を割いて詳述されており、特に東京書籍の１３４・１３５ページ、教育出版の２１２・２１３ページでは戦時体制下の子供達にスポットをあてた学習が用意され、同世代の児童たちに考えさせる内容になっている点が評価できます。

また、公民分野の自衛隊に関する記述は、教育出版では６年２３・５１・５３・２７９ページに国防・災害派遣・国際協力の各項目で説明され、このうち２３ページには自衛隊の合憲・違憲の解釈に触れています。東京書籍では６年政治・国際篇１９・４９・９９ページにみえますが、合憲・違憲の解釈については特筆がありません。

全体的に、東京書籍は事実を客観的に記述するにとどめて考えさせる余地を設けているのに対して、教育出版はそこに社会が抱えている課題についても触れ、問題意識を根付かせる工夫がとられていると思いました。

基礎・基本を学習する各単元の中身については両者ともに優劣をつけがたい部分がありますが、各単元の学習の進め方については、東京書籍のほうが授業者にとっても学習者にとっても取り組みやすい内容になっているのではないかと思い、私は、１位に東京書籍、２位に教育出版を推薦いたします。

以上です。

○佐藤教育長　ありがとうございました。

それでは、私からでございます。

社会科は、グローバル化する国際社会で生きていく上で必要な資質能力を育成するための教科でございます。学習の問題を追及、解決する活動を重視していると認識しております。

そういった学び方の観点から３者の教科書を比較しましたところ、３者とも、つかむ、調べる、まとめるといった学習過程や、この時間に着目すべき「見方・考え方」を明記するなどの工夫が見られておりました。

その中でも東京書籍と教育出版は、「まとめる」のページにおいて、小単元で学習した内容やキーワードが一目で分かるように工夫されております。さらに東京書籍は、例えば、地図ノートにまとめる、フローチャートにまとめて話合う、表に整理する、立場でまとめて話合う、プレゼンテーションソフトを使ってまとめるなど、様々な手法によるまとめ方の例示がそれぞれにございます。児童自身が社会の学習過程を理解し、主体的に学習を進めやすいと考えました。

また、東京書籍、教育出版は、生活科からのつながりが分かりやすく、児童にとってより学びやすいのではないかと思ったところでございます。

以上のことから、私は１位、東京書籍、２位、教育出版として推薦をさせていただきま

す。
　神田委員、お願いいたします。
○神田委員　社会の教科書選定の視点として、①資料の量と質、その活用の仕方が明確か②主体的・対話的で深い学びの視点が取り入れられ、学び方を身に付けられる内容か③思考力の育成が可能であるかという視点で選びました。
　どの教科書も優れていると思いましたが、注目したのは、教育出版と東京書籍です。
　①の資料の量と質、その活用について比べてみました。
　教育出版は、写真や表、グラフなどの資料が豊富に掲載されています。多くの資料を基に学習課題に迫っていく作りになっています。どの資料をどのように使うかは児童の学び方に繋がります。資料と資料を関係付けて考えられるように工夫がされています。児童に、図やグラフの読み取る力を付けられるようになっています。例えば、第５学年の２４Ｐ～２５Ｐの生産量の資料では、どこで米が多く作られているかを視覚的にとらえやすい地図で示されています。東京書籍にも掲載されていますが、比較すると、教育出版の方が実態が掴みやすく、分かりやすい資料となっています。
　６年生の近代日本史の写真は今まで白黒写真がほとんどでしたが、それをカラー化した取り組みも面白いと思います。児童はカラー写真が当たり前の時代です。白黒の写真は古いものをいう観念を取り除いて内容を比較することもできるのではないでしょうか。
二つ目の視点「主体的・対話的で深い学びの視点が取り入れられ、学び方を身に付けられる内容か。」という観点から考えます。
　両者とも「学び方」が巻頭に示されています。
　５年を例に挙げますと、教育出版は、巻頭の６ページにありまして、「つかむ→調べる→まとめる→つなげる」の流れになっています。東京書籍では、「低い土地のくらし」の２４ページ単元途中にありまして、「つかむ→調べる→まとめる→いかす」になっています。これは、両者の基本的な考え方だと思いますのでその視点で教科書を見ていきました。
　また、社会科として「公民的資質の基礎を培う配慮がされているのか、思考力を育成する視点をどのように盛り込んでいるのか。」も見ていきました。
　まずは、単元内での流れです。
　例としまして、教育出版では、５年生の「工業単元」を見ていきました。「工業製品→自動車の変遷→自動車工場→地域輸送→新しい自動車→鉄・石油などの原料について→貿易→輸送手段→工業地帯→これからの工業製品」と身近なことから広がっていくイメージで構成されています。一つ一つがつながっており、この教科書の特色でもあります。
　東京書籍では、「工業製品→工業地域→自動車工場→地域輸送→新しい自動車→造船・製鉄・石油・食料品などの工業→貿易→これからの工業生産」と概観を掴ませて身近なことに近づけていくイメージで構成されており、広い知識を習得したのちに学んだことを生かすつくりにしていると感じました。　私としては、身近なことの知識から始まるほ

うが、既習知識をいかせるのではないかと感じました。

続きまして、単元ごとの流れです。

例としまして、６年の歴史単元のはじまり部分を見ていきました。歴史単元は、「政治単元を終えた後に始めること」と、学習指導要領で定義されています。これは、公民的資質の基礎を培うという大きな目標の下に実施されている内容です。それだけに、注視させていただきました。

政治を学んで、歴史学習に入ります。教育出版は６８ページ『日本の歴史』で選挙を導入で扱っています。ここで現在の投票所と１００年前の投票所の違いを比較させています。政治単元で学んだことをつなげて考えさせるつくりで良くできていると感じました。自分事と捉えさせることで、歴史がどのように変わって今があるのかを最初に感じられれば、歴史を学ぶ意義もあると感じさせることができます。１冊本にしている良さもあると感じました。

東京書籍では、政治を学んだ後に、別冊の歴史編で歴史に入ります。歴史の導入で『歴史博物館に行こう』で始まります。別冊ということもあり、政治で学んだことが生かしにくさはありますが、教員が工夫をして導入を考えれば、歴史学習を学ぶ意義を児童に感じさせることができると感じました。

次に、三つ目の視点、「思考力を育成する視点をどのように教科書で実現しているのか。」という点を見ました。これは、PISAでも出題されるグラフや図などの非連続型テキストを活用した問題を読み解く力を培うことにも繋がります。社会科はこの力を育成する教科としては最適です。

両者の各学年のもくじにある「読み取る」に着目して内容を見てみました。

両者ともに各学年で取り扱われています。

教育出版は『学びの手引き　読み取る』の当該ページを見ますと、薄い黄色で枠囲みされていまして、そのページに位置付けられているグラフ・地図などを活用して考えさせる内容になっています。要所要所でこの「読み取る」が出てきて、実際のグラフや図を活用して考えさせる学習過程になっていると感じました。また、児童によっていくつかの考えが出てくることが考えられ、協働的な学びの場としても扱えると感じました。

東京書籍は『学び方コーナー　読み取る』の当該ページを見ますと、紫でコーナー設置があります。そのページに位置付けられているグラフ・地図などを活用して考えさせるつくりになっています。また、その当該ページに児童の吹き出しで読み取らせる内容が記述されており、その活動が苦手な児童も問いに対する答えにたどりつけると思います。
私としては、まずは、自身で思考し、友達と意見を交わし、新たな視点や考えを身に付けさせたいと考えています。まさに、主体的・対話的で深い学びです。

その他、５年生の情報単元の扱い方について見ました。

ここは学習指導要領で、情報通信技術を生かした「販売，運輸，観光，医療，福祉などに関わる産業の中から選択して取り上げること」と記述されています。両者とも、まず

はマスメディアから入り、販売を大きく扱っています。教育出版では全国チェーンのスーパーを扱っており、東京書籍は大手コンビニエンスストアを扱っています。両者とも扱いは大きく変わらないと感じました。

インターネットの扱いも、教育出版では190Ｐに記載があり、東京書籍も下巻の８０ページに記載があります。

さらに教育出版では、１９８ページにピンクの囲みで「感染症の影響」と目立つように記載があり、インターネットを活用して職場や学校にいけない環境の中でも社会生活が行えたことの記述がありました。私たちが語り継がなければいけない社会の出来事であり。まさに通信技術の恩恵といえると思います。

どちらも優れた教科書でありますが、以上のことを総合しますと、第１位には、教育出版を第２位に東京書籍を推したいと思います。

〇佐藤教育長　ありがとうございました。

浦井委員、お願いします。

〇浦井委員　社会という教科は、ともすれば「暗記科目」になりがちな教科ですが、歴史も政治なども、ストーリー性を持たせて理解し、頭に入れることが大切であり、それによって疑問や興味も沸いてくるものかと思います。したがって社会の教科書は、特に繰り返し熟読して学ぶことができるものであることが大切と考えました。

そのうえで私は、第１位を東京書籍とし、第２位以下はなしとさせていただきました。東京書籍の大きな特徴のひとつに、５年生および６年生の教科書をそれぞれ２分冊していることがあると思いますが、これは必然的に１冊の重さが軽くなり、子どもたちの持ち運びの負担が減ると同時に、読み返すときにも楽ではないかと考えました。また、中学校以降、社会科が大きく「地理」「歴史」「公民」の３つの分野へと分かれていく前段階として、「歴史編」と「政治・国際編」をはっきり分冊して分けて扱うという試みが良いと感じました。中学校以降の「地理」「歴史」「公民」は、互いが大きく関わり合う内容ですが、どうしても分断して捉えられがちです。その点で、３年生から５年生までに学んだ地理的なものを中心とした社会の授業が、さらに進んで分かれていくのだというイメージで捉えやすくなり、良いのではないかと感じました。

また、６年生の歴史編におきまして、各時代の最初のページの右端に、必ず時代区分表が印刷されており、自分が今学んでいる時代が、歴史の流れの中でどの位置にあたるのか分かるように工夫されています。私自身、歴史を専門としておりますが、これは大変わかりやすいのではないかと思いました。

その他、３年生～５年生の教科書におきましても、東京書籍は写真資料がやや小さめなものの鮮明で、見やすくなっております。白黒写真に色をつけてカラー化することは、他の委員もおっしゃられたように、もちろん今の子供たちに受け入れられやすいなど良い面もあります。東京書籍の場合、あえて白黒写真に色をつけずそのまま使用しておりますが、これは子どもたちの古い時代のものや資料を尊重する姿勢を養うことにつながるので

はないかと感じました。この点は、歴史資料を扱う社会という教科には重要なことではないかと思います。

さらに東京書籍は、生活と関わる具体例も的確に示されており、調べ学習のまとめ方の例示もあって、子どもたちが主体的に疑問を持ち、問題を解決する力を養うこともできるようになっております。また、子どもが書き込めるスペースが多く、教科書を中心に学べるなど、いろいろな面で使いやすく分かりやすいのではないかと考えました。

もちろん、その他の発行者につきましても、それぞれの工夫をなさっており、それぞれに良いところがありましたが、子どもたちが学びやすく、また教える側も教えやすい、両者の使いやすいものとなると、東京書籍が圧倒的に良く、逆に２位以下の順位が一長一短で大変つけ難かったこともあり、第１位を東京書籍とし、２位以下は挙げない形とさせていただきました。

以上です。

○佐藤教育長　ありがとうございました。

ただいま、各委員から推薦する発行者についてご発言をいただきましたが、集計した結果について事務局に報告させます。

（集計）

○事務局　それでは、ただいまの集計結果について申し上げます。

第１位に、東京書籍を推薦された方が４名、教育出版を推薦された方が１名、第２位に、東京書籍を推薦された方が１名、教育出版を推薦された方が２名、日本文教出版を推薦された方が１名。

以上でございます。

○佐藤教育長　ただいまの集計結果のとおり、１位に東京書籍を挙げた方の数が４名と最も多く、過半数を超えております。このことにより、社会については、東京書籍に仮決定させていただきたいと思いますが、そのことについて附帯意見などございますでしょうか。

（なし）

○佐藤教育長　それでは、社会については、東京書籍に仮決定させていただきたいと思いますが、これにご異議ございませんか。

（異議なし）

○佐藤教育長　ご異議ございませんので、社会については東京書籍に仮決定いたしました。

地図

○佐藤教育長　続いて、地図について、ご審議願います。発行者は２者となっております。

それでは、各委員から採択すべき発行者について、順位をつけて、ご発言願います。

髙森委員から、時計回りの順にお願いいたします。

○髙森委員　教科「社会科」種目「地図」に関して、地図帳は、学習を質を高めるための「道具」としての意味合いが濃厚な教材となりますので、他の教科と異なり、まずは地図

あるいは地図帳の活用法が具体的に示されているかどうかが重要ではないかと思います。児童は、小学校で初めて本格的な地図帳を手に取るわけですから、地図の意義、利用上の注意点や決まり事、凡例、活用法などの基本事項は、かなりのページを割いて説明があるべきところだと考えます。また、地図帳は、国語科・理科・外国語科などの教科でも横断的に活用される教材となるわけですが、特に社会科に特化してみた場合は、地名や地形がわかるだけではなく、資料図・統計表などの資料編の充実度も重要となります。

このように資料として有効に活用できるかという点に着眼し、見やすさ、情報量、利便性など総合的に判断して、私は、１位を帝国書院、２位を東京書籍といたしました。

帝国書院の最大の魅力は、冒頭の２０ページに亘り、つまり全体の６分の１ほどを割いて、地図とは何か、地図の約束、地図帳の使い方が詳細に説明されており、これから地図帳に触れる児童たちに、地図帳を使って何ができるかを具体的に提示している点が好感を持てます。一方、東京書籍は、同様のガイダンスが１４ページに圧縮され、ゆとりのなさと情報量の少なさを感じます。

また、地図帳の基本となる地図の部分でも、たとえば帝国書院の６３ページと東京書籍の４１ページの関東地方を比較いただければ一目瞭然になりますが、文字情報はほぼ同じでも、帝国書院のほうが地形の色分けなど立体的に見える工夫が施され、リアリティーを追求しているという印象があります。

資料編となる資料図・統計表に関しては、たとえば災害大国日本ならではの資料類が充実しているのは帝国書院です。具体的に、帝国書院では、自然災害に関する事例が９９・１００ページの２ページ、防災に関する資料が１０１・１０２の２ページと、合計４ページに亘って整理されて充実しているのに対して、東京書籍は過去の災害事例が９７ページから９９ページの３ページを使って組まれ、防災に関する記述はこのうち９９ページ折り込み紙面の６分の１程度と分量的にも少なすぎる点が指摘できます。

また、検索機能という視点で索引に着目すると、東京書籍では、「壇ノ浦」「関ヶ原」などの古戦場の索引はありますが、帝国書院では、古戦場以外にも「鉄砲伝来地」「ペリー上陸地」などの項目で検索が可能な「歴史地名」というカテゴリーが用意されているといった特色があります。

このほか教育委員会の調査研究委員会の分析結果も勘案して、私は帝国書院を第１位、東京書籍を第２位といたします。

以上です。

○佐藤教育長　ありがとうございました。

社会の学習におきまして、必要な情報を収集する上で、地図は欠かせないものでございます。児童が調べたいと思ったときに、必要なページをすぐ開くことができ、分かりやすいことが重要だと考えております。

２者の教科書を見ましたところ、色や模様の分け方、絵文字の使い方などにおきましては、それぞれ工夫が見られたところでございます。

その中でも帝国書院は、地図を初めて使う第３学年の児童にとって、親しみやすくするための工夫がございました。地図の約束、使い方が、約２０ページにわたって取り上げられており、導入が非常に丁寧に記載されております。また、「地図マスターへの道に挑戦しよう」というコーナーがございます。ゲーム感覚で地図に親しむことができるのではないかと考えました。

東京書籍も地図の決まりや使い方は簡潔にまとまっておりますが、導入部分では若干ではございますが物足りなさを感じたところでございます。

さらに、帝国書院は、東京都の学習で使用できる地図が4種類に掲載されており、各授業の目的に応じた使い分けができると思います。

以上のことから、私は１位、帝国書院のみを推薦とさせていただきます。

神田委員、お願いいたします。

〇神田委員　地図は社会科の学習で活用するものであり、児童が使いやすいものが求められます。まず、視認性が重要かと思います。その他、多角的な視点から思考力・判断力・表現力等の育成ができるもの、児童の学習や教員の指導に活用できる資料が豊富であることなども挙げられます。地図を初めて使う３年生にとって親しみやすく、地図理解への配慮がなされているものなども選定の理由となります。

私は、１位を帝国書院で推したいと思います。

視認性とは、つまり目で見たときに確認がしやすいということです。帝国書院では、地図学習の最初にある「まちの様子」が上空から撮影した写真で示され、その他イラストを加えて分かりやすく説明されています。日本地図や世界地図を見ても色彩やデザイン等もすっきりとして見やすくなっています。

「広く見渡す地図」を使って５つの地方を学習した後、日本の領土とその周りを学習します。そのため日本の領土も理解しやすくなっています。その後、日本列島を詳しく学習するように作られています。近畿地方の学習のあと、江戸時代の結び付きを掲載し、歴史の学習ができるように工夫されています。中部地方南部の学習のあとに、愛知県の自動車産業に触れるなど、随所に工夫が見られ、児童の多角的視点から思考力を育成することができると考えました。

巻頭で「地図のやくそく」を６ページに渡って学習するようになっています。「地図帳の使い方」は４ページを使って説明されています。丁寧で分かりやすい説明となっています。

〇佐藤教育長　ありがとうございました。

浦井委員、お願いいたします。

〇浦井委員　私は、地図は、第１位を帝国書院とし、第２位以下はなしとさせていただきました。

地図帳は、資料として副教材的に用いられるものですが、社会科を中心に、あらゆる教科とかかわりをもって用いることができるものであり、非常に重要です。

帝国書院は、他の委員もおっしゃっていましたが、最初の約２０ページという多くのページを割いて、地図帳を使うための導入ができるように工夫されています。また、「地図マスターへの道に挑戦しよう」として、地図帳に親しめるようにも工夫されており、子どもたちに地図への興味を持たせやすくなっているのではないかと感じました。

また、地図はその時代の社会情勢を映し出す重要な資料となり得ます。今回、ウクライナの首都の表記が「キエフ」から「キーウ」に変えられておりますが、索引において東京書籍が「キーウ」でしか引けないのに対し、帝国書院は「キーウ」と共に「キエフ→キーウ」という項目も併記することで、「キエフ」という呼び方からも引けるように考慮しています。これまでに出された書物などのほとんどは、「キエフ」という表現であることを考えれば、索引で「キエフ」からも「キーウ」が引けることは重要です。また、このように表記の変化に配慮することにより、時代の変化も見て取れます。

さらに帝国書院は、全体の情報量も多く、さまざまな分野からの利用を考慮して作られており、幅広く使うことができる地図帳であると感じました。大判で多少重量はありますが、この点につきましては、地図という特性上、ある程度大きい紙面での表記が好ましいことは確かであり、日常的に持ち歩く教材ではないことからやむをえないものと考えました。また、レイアウトも見やすく、表紙も破れにくく汚れにくい工夫がされているように感じました。

こうしたさまざまな点において、帝国書院が良いと感じましたので、第１位を帝国書院とし、第２位は挙げない形とさせていただきました。

以上です。

○佐藤教育長　ありがとうございました。

垣内委員、お願いいたします。

○垣内委員　ありがとうございます。

私は、ほかの委員もおっしゃいましたけれども、地図については情報の収集やまとめという観点から、全ての学年で活用される非常に重要なデータ集であろうと思います。その観点から子供たちが調べたいと思ったとき、そしてまた教員の方が授業の中で調べさせたいと思ったときに必要なページをすぐに開くことができる、分かりやすいということが重要であると思います。

その観点から３点確認いたしました。特に地図を初めて使い始める第3学年の児童にとって親しみやすいものかどうか、ハードルが低いかということと、それから2番目は分かりやすいか、３番目はデータ量が豊富かということです。

この観点から、第１位は帝国書院、第２位は、私は東京書籍を推したいと思います。両者いずれも非常によく考えられて構成され、分かりやすく、それぞれ工夫があると思います。

導入部につきましては、帝国書院のほうがページ数も多く、丁寧に導入されていますし、「地図マスターへの挑戦」ということで、親しみやすさが前面に出てきているかなと思い

ますけれども、東京書籍のほうも「地図の決まり」、「使い方」といったものが簡潔にまとまっていて、非常に分かりやすいと感じました。

２点目の分かりやすいのか、特に視認性はどうかということですが、好みにもよるかと思いますけれども、いずれもよくできていると思います。

３点目のデータ量のところは、帝国書院のほうがページ数も多くて、非常に多角的なデータが豊富にあるかとも思いましたけれども、東京書籍の場合は、日本の伝統文化とか歴史的景観、祭り、食文化などの紹介にも配慮されております。国土、地理というのは、土地空間だけではなくて、そこでどんな活動がなされているかということも非常に重要なポイントかと思いましたので、大変好ましく思いました。もちろん帝国書院のほうも、昔の地図、江戸時代の結びつきといった形で、非常に工夫もこらされています。

なので、いずれもよいテキストだと思いましたけれども、第１位は特にデータ量が多様で多彩で豊富であるということから帝国書院、第２位は様々な工夫が凝らされているというところで東京書籍とさせていただきました。

以上です。

○佐藤教育長　ありがとうございました。

ただいま、各委員から推薦する発行者についてのご発言をいただきましたが、集計した結果につきまして事務局に報告させます。

（集計）

○事務局　それでは、ただいまの集計結果について申し上げます。

第１位に帝国書院を推薦された方が５名、第２位に東京書籍を推薦された方が２名。

以上でございます。

○佐藤教育長　ただいまの集計結果のとおり、１位に帝国書院を挙げた方の数が５名と最も多く、過半数を超えております。このことにより、地図については、帝国書院に仮決定させていただきたいと思いますが、このことにつきまして附帯意見等はございますでしょうか。

（なし）

○佐藤教育長　それでは、地図については、帝国書院に仮決定をさせていただきたいと思いますが、これにご異議ございませんか。

（異議なし）

○佐藤教育長　ご異議ございませんので、地図につきましては、帝国書院に仮決定いたしました。

算数

○佐藤教育長　続いて、算数について、ご審議願います。発行者は６者となっております。

算数は、数学的活動の楽しさに気づき、問題解決しようとする態度を身につけ、算数で学んだことを生活や他の学習に活用できるようにすることを目指している教科であると認

識しております。

６者、それぞれを比較してみましたが、どの者も学習指導要領に基づいて適正な内容となっておりました。各者とも、補充問題や既習学習と関連づけるような内容を単元末や巻末に取り入れて、子供たちに力をつけてもらうような構成になっております。

その中で、東京書籍は、学習指導要領の日常の事象を数理的に捉えという点や、算数で学んだことを生活や他の学習に活用できるようにするといった点を考慮して、児童の実生活につながるような問題や課題を提示しております。

また、課題を解決していくための考え方を段階的に提示しており、児童が主体的な学習を進めやすい構成になっております。

他にも、演算の決定の鍵となっていく数直線図の利用においても第１学年から系統的に扱っており、さらに２次元コードによるコンテンツの中でも実際の書き方や手順が説明されております。

また、学校図書は、主体的に考えることができるようにする様々な工夫の中で算数を使って、社会のため、世界のため、どんなことができるかという問いを持続可能な開発目標、SDGsの１７個の目標を活用し、討論を促す内容になってございます。

例えば、第４学年で、算数を使ってバスのバリアフリーを考えようとして身近な公共交通機関を切り口に、これまでの学習内容を踏まえて問題を解決させる内容になっています。低床バスやリフト付きのバスの台数の変化を表すグラフを見ながら、倍の計算、少数の表し方の知識を使い、主体的に議論を進めていく内容でございまして、次のページには個人の理解度を振り返ることができるようになってございます。

さらに、学校図書のみ、「中学校へのかけ橋」と題して、６年生の別冊として中学校の内容に触れております。別冊として扱っているのは学校図書のみであり、私としてはその点も扱いやすいなと思ったところでございます。

以上の観点から、私は東京書籍を１位、学校図書を２位として推薦をさせていただきます。

神田委員、お願いいたします。

○神田委員　算数は、①数や図形などの基礎的な理解と技能を身に付けること、②論理的に考察する力数学的な表現を用いて表現する力などを身に付けることが大切です。③数学的な活動を通して学んだことを生活や学習に生かそうとすることなどが必要です。また、台東区は特に算数の学力向上を目指しています。苦手な児童にも理解できる教科書という視点からも考えました。

まず、算数で押さえておきたいのは、教科の特質として、しっかりとした積み上げが必要だということです。例えば、「この公式を覚えなさい」では、丸暗記の記憶となり、長く知識として定着しません。大事なのは公式の原理をしっかりと理解しているかにかかってきます。その力を培うためにも、思考させる場面が位置付いているのかが重要になります。そして、その場面設定の仕方も気になります。

よく、算数・数学が社会に出て役立つ場面が少ないということを耳にします。それだけに、算数・数学が実生活に紐づくものであることを児童が感じられることも重要になってきます。

さらに、苦手な子をそのままにしない手立てがあるかも、教科書を選ぶ視点に入れて考えました。

算数は６者が発行をしています。どの教科書も優れていますが、その中でも、教育出版と東京書籍が特に優れていると感じました。

単元の導入の扱い方ですが、教育出版は、全ての単元導入で学習する項目を入っていません。「どんな学習がはじまるか」ということで何を学ぶのかを伏せた状態で児童に考えさせるつくりになっています。

例えば「わり算の学習」を学ぶ単元で「わり算」というふうに書いてしまっているとどうでしょうか。児童は「わり算」で解くのだと気づいてしまいます。テストのときに「わり算で解きましょう」という問題はないと思います。

続きまして、導入ページが生活に密接に関係しているかです。

５年生の『割合』の単元導入で見ていきました。割合は児童に理解させるのが難しい単元です。しかしながら、社会に出てこの割合を考える場面が多くあると思います。
教育出版の１７４ページでは、「シュートがよく入ったのはどちらかな？」でバスケットボールのシュート練習を扱っています。ここでは、はるさんと、れおさんの入った数は分かっているけれど、投げた数が、れおさんの分だけ分からない状態になっています。はるさんのシュートも１０回入って投げた数は２０回という数字で、算数が苦手な子でも半分が入ったということが分かる数値で示されています。人数も２人と考えやすく、思考しやすい内容になっています。実生活に密着しており、分かりやすい導入だと感じました。１７５ページでは学んだ考えをもとにチームのシュートの表があり、４人の中の誰が、一番シュートが入ったのかを考える構成になっています。学んだことをすぐに活用でき、同じバスケットボールで考えられるのもよいと感じました。
東京書籍の６４ページでは、「いちばんよく成功したのは？」で同じようにバスケットボールのシュート練習を題材で扱っています。ここではAさんBさんCさんで一番よくシュートが成功した人を考えるというものです。いきなり３人を比べるのは少し難しい思考が必要になると感じました。数値もAさん：６の１５　Bさん：６の１２　Cさん：９の１５と多くの数値が出てきますので、授業をする先生の力量や児童の実態によっては難しいかと思います。

続きまして数直線の扱い方に関して話します。数直線は自分の頭の中にある数値を実線に置換える行為です。分かりやすく言いますと、アウトプット能力や視覚化する能力とも言えます。これらの力は日ごろからの積み重ねが大事になります。

数直線・線分図の扱いは各教科書で異なってきます。教育出版と東京書籍を比べてみました。

教育出版は２年生から、東京書籍は３年生から、学年の巻末資料で数直線・線分図の書き方を学び直しできるように工夫しています。

両者とも数直線は１年生から扱っていますので一例を挙げます。

両者とも『１０以上の数』の単元です。

教育出版は、８４ページの上部にまずは数値を自分で書き込む欄があり、数直線を作成することから始まります。そして、①で数値をひとつ足す活動を行い、②で数値をひとつ減らす活動を行い、③で数値を２つ足す活動を行います。

足し算と引き算を既習事項としてもった知識を活用できるような構成となっています。

東京書籍は、４２ページの上部に数直線が示されています。そして活動として△９の①で数値をひとつ足す活動を行い、②で数値を２つ足す活動を行います。

両者とも１年生から数直線という概念を児童に感じさせる取組で素晴らしいと思います。

最後に、苦手な子をそのままにしない手立てがどのようになっているのかの視点で見てみました。ここは、単元ごとの終わりの定着場面を見ていきました。

教育出版は、２年生以上の単元末に「ふり返ろう」と「たしかめよう」が設置されています。「ふり返ろう」では４コマ漫画を全単元に掲載しており、楽しみながら振り返りができます。４年生以上の「たしかめよう」には「考えるヒント」が設置されています。４年生のから５年生になる頃に算数のつまずきが表れる児童が増えてきます。そのような児童への配慮がされていると感じました。

東京書籍では、２年生以上の単元末に「たしかめよ」と「つないでいこう 算数の目～大切な見方・考え方」が設置されています。「たしかめよう」では確認問題に取り組み、「つないでいこう 算数の目」で学んだことの最終確認を行う場というイメージをもちました。

教育出版は、文字の大きさも大きく、紙面デザインもぎゅうぎゅうに詰められておらず視認性が高いと感じました。算数は学年が上がるごとに難しいイメージになってしまうため、重要な視点と考えています。また、４コマ漫画など、算数が不得手な児童への配慮も素晴らしいと感じました。それぞれの表紙にQRコードがありその学年に即した動画が見られるのも面白いです。

これらの視点から、総合的に考えて、私は第１位に教育出版を、第２位に東京書籍を推したいと思います。

○佐藤教育長　ありがとうございました。

浦井委員、お願いいたします。

○浦井委員　私は、第１位を東京書籍、第２位を学校図書とさせていただきました。

算数は中学から数学という教科名になりますが、算数の目的は、日常的なことがらを計算で正確に答えを出せるようになること。数学の目的は、日常的でない事象もふくめ、なぜそうなるのかを数字や記号を用いて論理的に説明できるようになること、というような

違いがあるといいます。

したがって算数は、日常のどういう事例に関係しているかをわかりやすく説明し導入できていること、分数や比などの抽象的な概念を具体的な例を示してわかりやすく説明できていること、などが重要だと考えました。子どもたちに、今学んでいることは日常のどのような場面で使えるのかを実感させることによって、より深い理解を促すことができると考えます。

算数といえば、どうしても速く正確に計算できることばかりが重要視されますが、そればかりではなく、何故どう解くかが理解できないといけません。実際に、近年の中学受験では、解き方を暗記しているだけでは解けないような、思考力を問う問題が数多く出題されているなど、自分で考え、解いていく力が求められています。

また、算数は、低学年からの積み重ねで、その時々にきちんと理解していかないと、上の学年になってまた関連する単元が出てきたときに、一気にわからなくなってしまう場合があります。

どの発行者もそれぞれ工夫がありましたが、なかでも東京書籍は、数直線を書かせて考えさせる方法などを、低学年から繰り返し系統的に学べるよう工夫されており、数学的な思考が身に付きやすいのではないかと思いました。また、例示している問題もバランスよく配置されており、紙面も見やすくすっきりしており、使いやすいと考えました。

学校図書は、変型判であり大きくて多少重いことが気になりますが、横幅を大きく取っている分、紙面の配置が、問題のすぐ横にヒントを提示するなど、目を上下に動かさずに、必要な時にそのまま目を横にやるだけで必要な情報が目に入るように構成されています。子どもは、上下に何度も目を動かして情報を集めるのが苦手な場合もあり、この配置は子どもの理解を助けるのに良いのではないかと考えました。また、１年生の算数への導入だけでなく、さきほど他の委員もおっしゃっていましたが、学校図書のみは6年生の最後に別冊として「中学校へのかけはし」という冊子をつけ、算数で見つけた見方・考え方をどう使っていくか振り返れるようにしたり、中学校で学ぶ単元につながるマイナスなどの内容を取り上げたりしてあります。これは、中学校での数学に向けて、大変良い工夫であると感じました。

東京書籍と学校図書が僅差で、正直大変迷いましたが、より系統立った構成で教えやすいことなどから、東京書籍を第１位とし、学校図書を第２位とさせていただきました。

以上です。

○佐藤教育長　ありがとうございました。

垣内委員、お願いします。

○垣内委員　ありがとうございます。

私は、学習指導要領の数学的な見方、考え方を働かせ、数学的活動を通して、数学的に考える資質能力の育成というところに着目いたしました。

数学的とは何かということなのですけれども、筋道を立てて、そのデータ、得られた情

報を基に、合理的かつ数量等の客観的なデータを踏まえた論理展開ができるようにするための基礎的な知識を得て、そしてその能力を養うという非常に重要な科目であるというふうに理解いたしました。

また、学力テストなどの結果を踏まえますと、どうしても学年が上がるごとに児童の中で算数が苦手なお子さんたちとそうでないお子さんと二極分化をしていく傾向もあるように拝見いたしております。

その観点から２点、基礎的な考え方と基本的なスキルを定着するということ、それから二つ目には算数というか、合理的な考え方、数学的な見方、考え方を身につける、そのためにハードルが低い、親しみやすいという、この2点を注目して拝見いたしました。

いずれの教科書も非常によくできておりまして、教科書の使い方から学び方、そして構成やノートの使い方、見通しをもって構造的・主体的に学べるような構造になっているというふうに思いました。

また内容面についても、非常に工夫がなされていて、導入から振り返り、練習問題、そして確かめという形で、各者、非常に工夫がなされていて、いずれも優劣つけがたいというふうにも思いました。親しみやすさという観点からも、キャラクターを使うなど、それぞれ工夫をされています。またプログラミングなどについても言及があり、いずれもよくできているなというふうに思いましたが、私は、第１位が東京書籍、第２位が教育出版、第３位が学校図書とさせていただきました。

東京書籍は非常に丁寧で、分かりやすく、できるだけ落ちこぼれないというか、そこで立ち止まらないような工夫というのが、随所に見られております。また、特に基礎的な概念をしっかり定着させるという点については、ほかの委員がおっしゃった点でもありますけれども、数直線図についても、1年生から系統的に何回も繰り返して学ぶことができるようにしているという点、非常に高く評価させていただきました。また、併せて、ハードルを下げるという観点からも、「おもしろ問題」という名前で、発展的な活用問題が配置されていて、児童の実態に合わせて、選択して使用できるという点も、非常にいいかなというふうに思いました。以上、第１位が東京書籍になります。

第２位の教育出版ですけれども、こちらにつきましては、巻末に練習問題があるというのはほかと同じなんですけれども、自分で取り組むページの「ステップアップ算数」という補充問題もあります。これにより習熟度別に取り組むことができるのではないかというふうに思われます。また、巻末の学びの手引きの中で、数直線・図形の考え方・書き方などを簡潔にまとめていて、必要なときに、戻って活用するということもできるかなというふうに思いました。あわせて非常に楽しい、親しみやすいという観点もございますので、第２位が教育出版。

第３位の学校図書につきましては、ほかの委員もおっしゃいましたけれども、中学校への、中学校の数学への橋渡しということが意識されているというところも、評価できるかなと思います。

いずれも僅差ではありますが、第１位が東京書籍、第２位が教育出版、第３位が学校図書になります。

以上です。

○佐藤教育長　ありがとうございました。

髙森委員、お願いいたします。

○髙森委員　算数科では、冒頭に申し上げた視点のほかに、児童の興味・関心を高める工夫がなされているか、日常的な身近な題材が活用されているか、他教科との関連が明示されているか、個々に応じた指導が可能かどうか、ドリル的要素となる問題数の分量が適当かどうか、補充・まとめ・発展学習などは充実しているか、といった点に着眼し、比較・検討いたしました。これらの分析を通して、私は、１位に東京書籍、２位に学校図書を推薦いたします。

まず、全篇の構成ついて、２社とも第６学年を除く各学年は上下２分冊仕立て、東京書籍は第１学年にＡ４判の別冊「はじめよう！さんすう」が用意され、一方、学校図書は第６学年にＡ４判の別冊「中学校へのかけ橋」が用意されています。東京書籍の別冊「はじめよう！さんすう」は、初めて算数という教科に触れる新１年生が、楽しく「数」について学ぶことかできる工夫が設けられています。同様のコンテンツは、学校図書第１学年最初の単元に用意されています。一方、学校図書の別冊「中学校へのかけ橋」は、小学数学が中学校での学びにどのように接続するか見通しを立てることができる工夫がなされています。同様のコンテンツは、東京書籍でも、第６学年２２０ページ以降の「算数卒業旅行」として用意されています。こちらは、いずれも「数学」というよりも、算数的考え方を数学的学習へとつなげていく内容になっており、数学の学習が楽しく思えるような工夫がなされています。なお、判型を大判として別冊に仕立てたことの効果を考えれば、新１年生向けとして用意された東京書籍の別冊「はじめよう！さんすう」が、算数への誘いという機能面では有効であるとは思います。

次に、児童の興味・関心を高める工夫、および日常の身近な題材の活用について見てみたいと思います。とかく算数は日常とかけはなれたところでイメージされがちですが、実は日常生活では国語に次いで多用される学問ではないかと思っております。そのことを児童が自覚できる内容となっているかどうかが鍵となります。その点において、学校図書では各単元の導入部分に用意された「はてなを発見」が、実によく工夫されています。たとえば、学校図書第５学年上巻の小数のわり算を学習する１１０ページでは、２リットル入り３９０円のジュースと、１リットル入り２００円のジュースではどちらか得かを知りたい時に役立つような知識を当該単元で学べることが提示されています。学校図書の導入部のコンセプトは、日常生活の身近な題材を例に考えさせる内容になっており、単元のつかみとしては効果有りと認めました。導入部分に関して言えば、東京書籍は、いきなり本題に入る感覚です。

一方で、単元の中身について比較すると、たとえば「凡その面積や体積」の学習につい

て、東京書籍では第６学年１４２ページから５ページにわたり１つの単元として独立しているのに対して、学校図書の６年では面積の単元の１３７・１３８ページ、体積の単元の１５０ページに別立てとなる計３ページにとどまり、実例の数も東京書籍が８種類、学校図書が面積・体積合わせても６種類と、この場合は東京書籍のほうが充実しています。

日常の算数的営みを積極的に題材として用いることは、算数に対する児童の興味・関心に直結する部分だと思いますが、これが導入部分で充実しているのが学校図書、発展学習に軸足を置くのが東京書籍という構図が見て取れます。両者ともそれぞれに特色ある編集がなされていると感じました。

次に、ノートの取り方について、東京書籍は「算数マイノートをつくろう」のコーナーで、学校図書は巻頭の「ノート名人になろう」のコーナーで、それぞれ解説があります。学校図書は巻頭だけですが、東京書籍は途中の単元にも「算数マイノートを学習にいかそう」のページが織り込まれていて、それぞれの単元に特化したノート作成の参考としている点で工夫が見られます。

既習事項の確認、学習事項の活用・振り返りについては、両者とも優劣をつけがたい構成になっています。東京書籍では、単元ごとに「いかしてみよう」「たしかめよう」「つないでいこう算数の目」の３本柱からなる「学習のしあげ」が重層的に用意され、加えて巻末の「ふりかえりコーナー」で各学年の総まとめが設けられています。一方の学校図書では、「できるようになったこと」「まなびをいかそう」「考え方モンスターでふりかえろう！」のほかに間違えやすいところを見直す「算数パトロール」が用意されるなど、学びを振り返り、深め、つなげていくという一連の活動を積極的に採り入れている点が、高く評価できます。

また、発展学習の内容の充実度については、東京書籍では「どんな計算になるのかな」「考える力をのばそう」「算数でよみとこう」が、学校図書では「算数をつかって」が用意されています。このうち、学校図書は５年生で「食べ物から環境を考えよう」、６年生に「バランスのよい食事を考えよう」「ハザードマップを見てみよう」など、私たちを取り巻く問題を知るために意外なところで算数が活用できるという視点が斬新で、単なるデータの読み解きで終わらない工夫がなされている点が評価できます。

学習内容のまとめについては、基本的に東京書籍・学校図書２社とも巻末には当該学年の既習事項のまとめはなく、かわりに補充の問題というかたちで提供されています。この点に関しては、当該学年の総まとめも欲しかったところですが、復習問題で代替するという理由でしょうか。

以上、細かな部分では、２者ともに優劣つけがたいところではありますが、それぞれの比較項目を総合的に判断して、私は、１位に東京書籍、２位に学校図書を推薦いたします。以上です。

○佐藤教育長　ありがとうございました。

ただいま、各委員から推薦する発行者についてのご発言をいただきましたが、集計した

結果について事務局に報告させます。

（集計）

○事務局　それではただいまの集計結果について申し上げます。

第１位に東京書籍を推薦された方が４名、教育出版を推薦された方が１名、第２位に東京書籍を推薦された方が１名、教育出版を推薦された方が１名、学校図書を推薦された方が３名、第３位に学校図書を推薦された方が１名。

以上でございます。

○佐藤教育長　ただいまの集計結果のとおり、１位に東京書籍を挙げた方の数が４名と最も多く、過半数を超えております。

このことにより、算数については、東京書籍に仮決定させていただきたいと思いますが、このことにつきまして附帯意見などございますでしょうか。

（なし）

○佐藤教育長　それでは、算数につきましては東京書籍に仮決定させていただきたいと思いますが、これにご異議ございませんか。

（異議なし）

○佐藤教育長　ご異議ございませんので、算数については東京書籍に仮決定いたしました。

議事の進行中ではございますが、昼食時となりましたので、ここで一時中断し、休憩を挟みたいと思います。

なお、再開は午後１時１０分といたします。よろしくお願いいたします。

それでは、これより休憩といたします。

（休憩・１２：０９～１３：１０）

○佐藤教育長　休憩前に引き続き、会議を再開いたします。

理科

○佐藤教育長　理科についてご審議願います。発行者は５者となっております。

それでは、各委員から採択すべき発行者について順位をつけてご発言願います。

神田委員から時計回りの順にお願いします。

○神田委員　それではお話しさせていただきます。理科の学習は、見通しをもって観察や実験を行うことを通して、自然の事象や現象を科学的に解決する力を付けることです。①自然の事象・現象についての理解を図り、観察、実験などに関する基本的な技能を身に付けること②実験や観察を通して問題解決の力を養うこと。また、実験や観察の指導では実験の仕方や安全面での指導が十分なされているかも重要です。③自然を愛する心情や主体的に問題を解決しようとする態度を育てることに力を入れているかという視点からも比べさせていただきました。

どの教科書も大きく見やすく編集されています。

私は、特に大日本図書、東京書籍の教科書が優れていると思いました。

大日本図書では、「理科の見方・考え方」について、「ココに注目」としてマスコットの吹き出しで示しています。この見方や考え方を基に、主体的に学ぶことができます。単元の導入は、見開きの大判写真になっており、自ら問いをもつことができるような構成になっています。見開きの大判写真はどの教科書より一番インパクトがありました。

東京書籍では、これまでは「理科のミカタ」だったかと思いますが、今回は「のばそう！理科のちから！」となり、これまでの理科の見方・考え方に当たるかと思います。

単元の導入は、東京書籍もインパクトのある写真やイラストがもちいられています。各ページの写真やイラストの色彩のよさは評価されます。

次に、実験や観察を通して基礎・基本が身に付くか、また問題解決的な学習が可能かという視点で、単元の流れについて見てみました。

大日本図書は、巻頭に「理科の学び方」が示されています。大きく「見つけよう→調べよう→伝えよう」となっており、「①問題を見つけよう②予想しよう③計画を立てよう④調べよう⑤記録しよう⑥考えよう⑦まとめよう」の流れとなっています。教師が授業展開をしやすく、児童にも学習の流れが分かりやすく示されています。また各ページの説明も分かりやすいです。

実験など危険が伴う場合には、「注意」のマークがあり、赤字で目立つように注意事項が書かれていて、安全に配慮が感じられます。「サイエンスワールド」では、SDGsのマークが付き、環境等に配慮するコラムなどが掲載されています。中学で学ぶことも内容に含まれています。

東京書籍では、３年生巻頭に「くらべて考えよう」のコーナーを設け、生活科からの接続を意識して構成されています。

学習の流れは、「問題→予想しよう→計画しよう→観察・実験→考察しよう→まとめ→広げよう！理科の発想」となっています。広げるという視点を大切にしているところは評価できます。また、「注目する」では多面的な見方や他教科との繋がりを意識することができます。「成長を知る」では、学ぶ前と学んだ後の考えを比べるようになっています。深い学びを自覚する上で大切な視点です。

どちらの教科書も優れた点が多くありますが、私は第１位に大日本図書を、第２位に東京書籍を推したいと思います。

〇佐藤教育長　ありがとうございました。

浦井委員お願いします。

〇浦井委員　小学校の理科は、学習指導要領によれば、「自然に親しみ、理科の見方・考え方を働かせ、見通しをもって観察・実験を行うことなどを通して、自然の事物・現象についての問題を科学的に解決するために必要な資質・能力を育成すること」とされています。このことから、理科の教科書には、具体的な体験である実験の手順や過程がわかりや

すく示されていること、考察への誘導が的確なこと、自然に親しむための工夫がされていることなどが欠かせないと考えました。

そのうえで、私は、第１位を大日本図書、第2位を東京書籍、第３位を学校図書とさせていただきました。候補となった発行者は、いずれも工夫があり、３年生で初めて理科という教科を学ぶにあたり、１，２年の「生活」の教科からスムーズにつながるよう、導入部分を意識してあるなど、それぞれに良い点がありましたが、大日本図書、東京書籍、そして学校図書は、特に６年生から中学で学ぶ「科学」へのステップアップも丁寧に説明されているように思いました。また、５年生の振り子の単元などで、算数の平均などの単元と結びつけながら学べる試みがされている点が、子どもたちに自分たちの学んだことを結びつけながら応用させることになり、問題解決の力を養うことにもつながるため、とても良いのではないかと思いました。

なかでも大日本図書は、実験の進め方やその過程の説明がもっとも丁寧であるように感じました。くわえて、実際の実験の写真などがわかりやすく載せられており、子どもたちが実際に取り組むにあたってイメージがわきやすく、教える側も指導しやすいのではないかと考えました。

取り上げている観察・実験の数は少なめですが、実際に限られた授業数のなかで行うことのできる観察や実験の量を考えれば、数は少なくとも厳選して丁寧に説明してあることは大変良いと感じました。また２次元コードも、それぞれ内容が明示されており、使いやすいと感じました。他の発行者の教科書よりも重量が多少重めなことが、子どもたちに負担にならないかという懸念はありますが、この点は、理科という教科が日常的に教科書を持ち帰って宿題などをする教科ではなく、毎回子どもたちに教科書を持ち帰らせることなく、学校を中心に使用するなどの配慮もしやすいと考え、内容の良さを優先しました。

このような理由から、私は第１位を大日本図書とし、第２位以下については正直迷いましたが、自ら問いを抱かせる工夫や、自然に親しむための導入となる写真などが、より良く示され、分かりやすい解説がされていることなどから、東京書籍を第２位、第３位を学校図書とさせていただきました。以上です。

○佐藤教育長　ありがとうございました。

垣内委員お願いいたします。

○垣内委員　ありがとうございます。

理科に関しましては、ほかの委員もおっしゃったように、学習指導要領で、自然に親しみ、そして理科の考え方、見方を働かせ、見通しを持って観察・実験などを行うことによって、自然の事物・現象についての問題を、科学的に解決するために必要な資質能力を育むというものです。自然の事物・現象についての理解、そして、観察や実験などを行って問題解決の力を養うということ。さらに、主体的にその問題解決に取り組むということが重要であろうというふうに考えました。

この観点から、各者の教科書を拝見させていただきましたが、構造的にも、そして、内

容的にもなかなか優劣がつけがたいところがございます。各教科書の初めに、学習の進め方、それから使い方、マークの説明などもありまして、主体的に学ぶこともできるかというふうに思いましたし、テキストの終わりに、振り返りという形で、非常に丁寧に説明がなされているという点、それから、ほかの教科、特に算数とのつながりについても、各学年ごとに非常にきちんと丁寧に流れが示されている点。また、タブレットの使い方も充実していますし、SDGsの考え方も含め、教材も豊富で十分であろうと思います。ただ、その上で、以下述べるような理由によって、私は第１位が教育出版、第２位が東京書籍とさせていただきたいと思います。

最近の非常に大きな科学的に対応すべき事象として、日本の場合、地震火山国ですので、こういった地球の動きについて、どのようなアプローチを提供しているのかということ、それと、近年、世界的に進んでいる気候変動、Global boilingと言われておりますが、そういった中で、こういったことをどのように説明しているのかということを、各者で比べてみました。データや写真を多用して、まず事実関係をきちんと正確に把握するということから始まる説明ぶり、その上で、いろいろな角度から考えさせる構成を取っているという点で、教育出版が、非常に優れた科学的なアプローチを提供していると思いましたので、第１位が教育出版です。

第２位の東京書籍も、非常に優れた教科書ではありますけれども、サイエンスという観点から見たときには、教育出版のほうが一歩リードかなというふうに思いました。

以上で、第１位が教育出版、第２位が東京書籍ということになりました。

以上です。

○佐藤教育長　ありがとうございました。

髙森委員、よろしくお願いします。

○髙森委員　理科の教科用図書選定にあたっては、まず学びの視点や学び方が明瞭に示されているか、予測・計画・観察・実験・考察等といった問題解決の手順が的確に示されているか、身近な現象・事象との関連性が示されているか、図版・写真は適切にまた効果的に活用されているか、器具の使用法や実験時の安全面への配慮などが明記されているか、ICT・デジタル教材は効果的に活用できるようになっているか、などを主な視点に比較いたしました。これらの分析を通して、私は、１位に東京書籍、２位に大日本図書を推薦いたします。

推薦理由として、まず目次の場所に着目したいと思います。理科に限らず、多くの教科では、一般的に大日本図書のように教科書の表２や見返しなど、表紙をめくってから目次にアクセスするのが普通ですが、東京書籍の場合は、表４つまり裏表紙に目次が組まれています。実は、これがたいへん便利で、わざわざ表紙をめくって目次を探す手間がかかりません。この方法は、他教科にも活用されるといいと思いました。

次に、教科の導入部分について、東京書籍は全学年とも巻頭４・５ページに、大日本図書は同じく全学年とも２・３ページに、それぞれ見開きで「理科の学び方」のページが用

意されています。このうち東京書籍では、更にこれに加えて２・３ページに各学年の「理科で学ぶこと」の見開きページがあることに着目したいと思います。一年間で学ぶべき事の概要が、「物のはたらき」「物の性質」「生命」「地球」の４分野に整理されて一目で分かる工夫がとられており、文字情報に頼らず画像を中心に組んであるのは、児童の右脳を刺激し、興味をかき立てる効果も期待されます。なお、今回１・２位に推薦した２者には見られませんが、他社のうち教育出版の教科書には、導入部分に前の学年の既習事項をふりかえるページが用意されている点がすばらしく、ここは各者にも参考にして欲しいところです。

本編の各単元の内容について、比較した内容をすべてをここで披瀝する時間はありませんが、全体的に、東京書籍は、観察実験数・資料数なども充実しており、問題解決に至る過程の説明、写真を多用した観察・実験の実例など、授業の円滑な進行や児童の学習理解にも充分に配慮した構成になっています。

具体例をあげれば、第６学年で学習する月の満ち欠けに関する実験では、東京書籍では８３～８６ページにわたって多くの図版を用いて提示されているのに対して、大日本図書では９９ページの紙面の３分の２程度しか用意されておらず、この点だけを見ても、東京書籍の実験重視の姿勢を理解することが指摘できます。

付録的扱いとなる巻末の資料については、東京書籍では「理科の調べ方を身につけよう」、大日本図書では「理科の学びに役立てよう」のページが用意され、２者ともに、理科の学習で欠かせないノートの取り方、理科室の使い方や器具の使用法など、必要充分な内容が整っています。また、当該学年の既習事項のまとめとして、東京書籍では「１年間をふりかえろう」、大日本図書は各学年の「まとめ」が用意されていますが、大日本図書はこれに加えて、たとえば第５学年の１９４ページに「６年生になったら」、第６学年１９４ページでは「中学生になったら」のページがあって、次の学年での学習内容の告知があり、児童が見通しをもって次のステップに臨めるのではないかと思いました。

ICT・デジタル教材の活用については、２次元コードが、東京書籍では学習や活動の要所に配置されているのに対して、大日本図書はフットノートに集約されている点が異なります。大日本図書は、２次元コードの視認性が高く、目的のコンテンツへのアクセスという面では優れていますが、一方、東京書籍は、授業との連動性が高いという点で特色が出ています。

なお、大日本図書には、６年の巻末に中学校の理科への接続を意識した「中学生になったら」のページが用意され、中学校での具体的な学習内容が端的に紹介されており、これからの学習を展望できる工夫がされている点が評価できます。

両者ともに優劣をつけがたいところがありますが、総合的に判断して、私は、１位に東京書籍、２位に大日本図書を推薦いたします。以上です。

○佐藤教育長　続きまして、私から理科についてお話しをさせていただきます。

理科は自然の事物・現象についての理解を図り、観察や実験を通して基本的な技能を身

につけ、問題解決の力を養ったり、自然を愛する心情や、主体的に問題解決しようとする態度を養ったりする教科であると認識しております。

そのような観点から、５者それぞれを見ました。どの会社も学習指導要領に基づき、適正な内容によって構成されており、理科の見方、考え方を育むために必要な「自然事象との出会い」、「予想」、「観察・実験」、「考察」などの学習の流れが丁寧に書かれている印象がございます。

特に、観察・実験の計画や方法についての記載には、観察・実験の結果の取りまとめや、考察への道筋を踏まえた多くの工夫がなされております。

その中でも、大日本図書は、実験で取り上げる対象を絞るなどして焦点化し、話合いを通じて考察を練り上げていく展開を提示するなど、対話的な問題解決を意識した構成であると思いました。また、予想を立てたり、実験の計画を立てたりする場面の記述においても、友達との対話を意識した構成になっております。

小学校理科の学習におきましては、児童の発達段階や、限られた授業時間などを考慮しながら、観察・実験の結果を根拠にした、主体的かつ協働的な学びを助ける教科書を使用することが望ましいと考えます。その点では、観察・実験の方法における「試行回数」や「結果のまとめ方」などの設定の丁寧さに着目したいと考えます。その点では、大日本図書と東京書籍、どちらも甲乙つけがたいほど、よくまとまっていると思っております。

したがいまして、総合的な判断から、私は、１位を大日本図書、２位を東京書籍として推薦をさせていただきます。以上でございます。

ただいま、各委員から推薦する発行者についてのご発言をいただきましたが、集計した結果につきまして事務局に報告をさせます。

（集計）

○事務局　それではただいまの集計結果について申し上げます。

第１位に東京書籍を推薦された方が１名、教育出版を推薦された方が１名、大日本図書を推薦された方が３名、第２位に東京書籍を推薦された方が４名、学校図書を推薦された方が１名、第３位に学校図書を推薦された方が１名。

以上でございます。

○佐藤教育長　ただいまの集計結果のとおり、１位に大日本図書を挙げた方の数が３名と最も多く、過半数を超えております。

このことにより、理科については、大日本図書に仮決定させていただきたいと思いますが、このことにつきまして附帯意見などございますでしょうか。

（なし）

○佐藤教育長　それでは、理科については大日本図書に仮決定させていただきたいと思いますが、これにご異議ございませんか。

（異議なし）

○佐藤教育長　ご異議ございませんので、理科については大日本図書に仮決定いたしまし

た。

生活

○佐藤教育長　続きまして、生活についてご審議願います。発行者は６者となっております。

それでは、各委員から採択すべき発行者について、順位をつけてご発言を願います。

浦井委員から時計回りの順にお願いいたします。

○浦井委員　１・２年生が対象である「生活」の教科は、子どもたちが小学校生活を始めるにあたっての心構えから、社会生活の注意点、３年生以降の理科・社会への導入と、非常に幅広い内容をあつかう教科となっております。いずれも、子どもたちに興味を持たせ、その大切さや楽しさに気づいてもらう必要があります。したがって、分かりやすく使いやすいことはもちろん、子どもたちが、自分がこれからどう学び、生活し、成長していけばよいのかという気付きを促せる内容になっていることが大切だと考えました。

今回候補となった教科書は、どれも１・２年生の子どもたちが学びやすいよう様々工夫されていましたが、次に挙げる理由から、私は第１位を光村図書、第２位を教育出版とさせていただきました。

まず光村図書は、ヨシタケシンスケさんのイラストを使用し、視覚的にも楽しく、また内容も子供たちが楽しみながら学べるよう、さまざまな工夫をされていると感じました。点のような目が印象的な大変可愛らしいイラストですが、好みが分かれる可能性はあり、どうしても受け付けにくいというお子さんはいるかもしれません。その点をどう考えるか悩みましたが、それを考慮しても上回る楽しさや工夫があると考えました。さらに、「ふりかえり」も、小単元ごとの「ふりかえり」と、単元ごとの大きな「ふりかえり」をくりかえすことで、知識の定着や確認が分かりやすくうながせるようになっており、使いやすいのではないかと考え、１位とさせていただきました。

教育出版は、３年生以降の理科や社会への接続を明記し、わかりやすく誘導している点。「学びのポケット」という巻末の部分で他教科へのつながりや広がりを紹介している点。そして、３年生以降の理科や社会へのつながりが明記されている点が良いと感じ、第２位とさせていただきました。

候補となった発行者は、いずれも２次元コードを活用できるよう工夫するなど、それぞれに良いところがありましたが、全体的なバランスの良さや子どもたちが楽しく学べる工夫などから、第１位光村図書、第２位教育出版とさせていただきました。

以上です。

○佐藤教育長　ありがとうございました。

垣内委員、よろしくお願いいたします。

○垣内委員　ありがとうございます。

生活に関しては、具体的な活動や体験を通して、身近な生活に関わる見方、考え方を生

かし、自立し、生活を豊かにしていくための資質能力を養う、その基礎の部分を担当するものというふうに思っております。自分自身だけでなく、身近な人々、社会、自然の特徴やよさ、それらと関わりに気づく。それから、自分自身、自分の生活に考え表現する。さらには意欲や自信を持って学んだり、生活を豊かにしようとする態度を養うといったようなことで、教室で教科書を開いて学習するというよりは、教科書が一つのきっかけを提供して、校庭とか、学区域に出て、実際に体験しながら学習するというところが重要なポイントかと思います。この観点から各者拝見させていただきました。以下に述べる点を考慮して、第１位を光村図書、第２位が教育出版と考えております。

いずれの教科書も、具体的に学習のつながりと見通しを意識しながら学習できるという点で非常に優れておりますし、スタートカリキュラムも充実しています。また保護者との連携も意識され、いずれもよく考えられているというふうに思いますが、光村図書の場合は、小学校の小単元ごとに問いかけの言葉があったり、活動や考え方のヒントが提示されていたり、また、小単元ごとに、観点を手がかりに振り返りができる。そういったようなことも仔細に盛り込まれております。また、大きな振り返りも単元末には用意されていて、日常生活とのつながりを持てるヒントもあります。こういった非常に丁寧な構成になっているという点から、第１位を光村図書、そして第２位は教育出版ですけれども、教育出版に関しても、かわいいキャラクターがあったり、写真が多く、見やすく配置されていたり、様々な工夫がなされていて、第２位が教育出版というふうに考えました。

以上です。

○佐藤教育長　ありがとうございました。

髙森委員、お願いいたします。

○髙森委員　小学校低学年の児童を対象とした生活科は、３年次以降の理科・社会科への導入的位置づけにある教科ですが、そこには学校生活を送る上での約束事、対話を通じた人間関係の築き方、学習の視点や態度、体験学習や調べることの楽しさなど、学校で学ぶすべての教科に通ずる学習を行う教科ではないかと感じています。

教科用図書の選定にあたっては、全体として児童の興味を引く上での工夫がみられるか、体験を通して気づきの発見や質を高める工夫がなされているかなどを中心に比較・検討しました。以上の視点から比較・検討した結果、私は、１位に光村図書、２位に東京書籍を推薦いたします。

まず、生活科を学習する意義について、光村図書・東京書籍ともに、巻頭のスタートカリキュラムの中や表４つまり裏表紙などに教員や保護者向けメッセージ欄が設けられ、学校と家庭での学習の接続をはかろうとしている点が高く評価できます。家庭での生活や地域での出来事、社会学習、自然体験などなど、学校でできないような体験の、そのどれもが小学生にとっては新鮮な学びにつながります。家庭と学校の学習の接続が、子供の豊かで多様な学びに繋がるという視点は、生活科では大切だと思います。

誤解してはいけないのは、この部分は単なる学校や家庭へのメッセージではないという

こと。発行者が当該教科をどのように位置づけているかが分かる肝の部分なのです。そこに示された内容が、当該教科用図書の編集方針に如実に反映されているはずなのです。従って、この部分の記述に着目することには、とても意味があります。２者を比較すると、東京書籍は、児童が本教科において学習する内容を概観するような説明にとどまっているのに対して、光村図書は、家庭との連携強化に軸足が置かれ、保護者が子供の学習に積極的に干与するよう促しているという特徴が見て取れます。これは生活科に限ることではなく、全教科に亘って重要な視点だと思います。これまでも、教育現場では、家庭学習への接続を保護者に要請する手段として、学校だよりやホームページを活用してきたのだと思いますが、今後は、それとは別に、各学校で「教科ごとの保護者説明会」のようなものを開くなどして発信する機会を是非設けて欲しいところです。

次に、内容について、生活科の学習の第一歩となる上巻冒頭のスタートカリキュラムには、両者ともに、学校という場の意味や学習への姿勢、学校生活を送る上での約束事、集団生活に欠かせない対話や相談の大切さなど、小学校という新しい環境で安全で充実した生活を送るために必要な事柄を豊富な写真資料や図版を用いて丁寧に解説しています。

また、登下校時や地域における安全教育についても、光村図書は上下巻の巻末に用意された別冊「ひろがるせいかつじてん」において、東京書籍は上巻の２２～２５ページと各巻巻末に用意された「かつどうべんりいちょう」においてそれぞれ設けられ、必要な学習ができるようになっております。

光村図書で特筆すべき長所は、すべての単元に振り返りが用意されている点です。更に、学習の中で取り組んだこと、気付いたこと、工夫したこと、もっとやりたいことなどを表現する活動が設定され、ディープラーニングを意識した構成になっていることは高く評価したいと思います。ちなみに、学習の振り返りについては、東京書籍には用意されていません。

次に製作物についての比較ですが、光村図書では、本編とこれに呼応するかたちで付録の「ひろがるせいかつじてん」で季節毎のおもちゃ作りと遊びが、東京書籍では、本編のみに季節のおもちゃ作りと遊びが、それぞれ用意されていますが、光村図書の方が製作物の種類も豊富で、なおかつ設計図も充実しており、学習者が取り組んでみたいと思える工夫がなされているようです。

最後に、巻末の付録を比べますと、光村図書は、上・下巻の巻末に「ひろがるせいかつじてん」が用意され、これが取り外し可能な付録的機能をもっているため、自然観察など校外学習で効果的に活用できるという利便性があります。一方、東京書籍には上・下巻ともに、学習の決まり事や進め方をまとめた「かつどうべんりてちょう」が用意され、上巻には本編の学習内容に呼応するかたちの植物の原寸大図鑑「ほんとうのおおきさ いきものずかん」も設けられるなど単元学習を補完できる工夫がなされています。ただし、取り外しができないため、教室外への持ち出しには向いていません。

両者いずれも長所があり、優劣をつけがたいところですが、相対的な均衡が取れている

のは、光村図書ではないかと思います。理科の学習につながる植物の栽培や観察、季節の変化への気づき、また社会科の学習につながる地域の探検や職業体験など、いずれも詰め込みすぎない適切な分量・内容になっており、また全体的に整然とまとめられた印象があり、たいへん好感が持てます。よって光村図書を第１位、東京書籍を第２位に推薦します。

以上です。

○佐藤教育長　ありがとうございました。

私は、生活科は具体的な活動や体験を通して、自立し生活を豊かにしていくための資質・能力を育成することを目指しており、幼児期の教育と中学年以降の教育との円滑な接続を図る上で、非常に重要な役割を果たす教科だと考えております。

６者いずれの教科書も、児童の学習意欲を高めるために、投げかけの言葉や写真の見せ方などに、様々な工夫が見られました。

体験活動を重視する生活は、振り返りの活動を充実させることで、学びの定着が確実になると考えております。振り返りの活動は、各者で様々工夫が凝らされておりますが、光村図書は小単元ごとに、つまり、一つの見開きページごとに振り返りを促す問いかけや、小単元の活動にあった三つの観点が示されているとともに、単元末にも、これまでの活動を想起したり、今後の日常生活につなげたりする投げかけが掲載されております。

また、教育出版は、単元末に「ぐんぐんはしご」が掲載され、自分の達成感によって、はしごの高さを選びながら、振り返りの活動を、楽しく子供たちが取り組めるようになっております。

以上のことから、私は、１位、光村図書、２位、教育出版として推薦をさせていただきます。

以上になります。

神田委員、お願いいたします。

○神田委員　生活科では、児童が、身近な人々や社会、自然と関わり、その良さや特徴に気付づくこと、自分の生活について考え表現すること、意欲をもって学んだり生活したりすることが必要です。このような視点から活用しやすい教科書を選びました。

生活科の教科書は６者から出されていて、様々な工夫が見られますが、特に光村図書と教育出版が優れていると思いました。

２者とも、多くの写真やイラストを活用して、児童の興味を引くように工夫されています。中でも、光村図書は、表紙のイラストがまず目を引きました。そして、写真やイラスト、デザインに新しさを感じます。写真からは児童の姿や活動や様子がよく伝わってきます。

学習の流れを見てみました。まず、１年生が生活科の学習を進めるためのスタートカリキュラムについてです。

光村図書は、折り込みの用紙をはじめ、学校現場の写真を含む様々な活動の様子を示し、発見を楽しみながら、小学校生活のイメージをつかむことができるように工夫されて

います。

教育出版では現場の写真が多く取り上げられていて、児童への興味を引くと思います。次に、単元の構成について比べてみます。

光村図書では、単元で学習することが明示されています。学習することを確かめ、考えるためのヒントが示されています。活動の仕方や作り方などは「ひろがるせいかつかじてん」が取り外し可能な別冊として巻末にあります。そこにはおもちゃ作りの例や色彩豊かな図鑑が掲載されています。最後に「ふりかえろう」で自分の学びを確認することができます。生活科で身に付けたい１４の力のマークが示され、チェックしたり、よびかけを基に学びを自分で振り返ったりすることができます。観察カードや気付きを書くカードの児童作成例が多く掲載されているのも評価できます。

教育出版では、「はっけんろうど」で学習の流れが自然に導かれるように工夫されています。ページの右側に「ひんと」や児童の作品例が載せられているので、学びがスムーズに進みます。単元の始めに「わくわくスイッチ」があり、異なる生活体験をしてきた児童が学習に興味をもてるように工夫されています。

両者とも低学年の児童が興味をもちすすんで学習に取り組めるような工夫があります。

総合的に考えて、第１位に光村図書、第２位に教育出版を推したいと思います。

○佐藤教育長　ありがとうございました。

ただいま、各委員から推薦する発行者についてご発言をいただきましたが、集計した結果について事務局に報告させます。

（集計）

○事務局　それではただいまの集計結果について申し上げます。

第１位に光村図書を推薦された方が５名、第２位に東京書籍を推薦された方が１名、教育出版を推薦された方が４名。

以上でございます。

○佐藤教育長　ただいまの集計結果のとおり、１位に光村図書を挙げた方の数が５名と最も多く、過半数を超えております。

このことにより、生活については、光村図書に仮決定させていただきたいと思いますが、このことにつきまして附帯意見などございますでしょうか。

（なし）

○佐藤教育長　それでは、生活については光村図書に仮決定させていただきたいと思いますが、これにご異議ございませんか。

（異議なし）

○佐藤教育長　ご異議ございませんので、生活については光村図書に仮決定いたしました。

音楽

○佐藤教育長　続きまして、音楽についてご審議願います。発行者は２者となっておりま

す。

それでは、各委員から採択すべき発行者について、順位をつけてご発言願います。

垣内委員から時計回りの順にお願いいたします。

○垣内委員　よろしくお願いいたします。

音楽の教科では、音楽表現及び鑑賞活動を通じて、音楽的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中で、音楽を豊かに、音楽と豊かに関わる資質能力を育成するということが目標として掲げられております。音楽の構造を理解したり、表現したりするための技能、それと併せて、音楽表現を工夫することや、音楽を味わって聞く、そういうことができる能力、つまり鑑賞能力、そして３点目として、音楽活動の楽しさを体験することによって、音楽に親しむという、この三つの点が重要かと思っております。

今、２者の教科書が出てきておりますけれども、この観点から、以下述べるような点で、第１位を教育芸術社、第２位が教育出版社とさせていただきたいと思います。

どちらの教科書も学習内容が明確で、学習目的、内容が明確で、かつ、２次元コードなども充実しておりますし、教材も適切であろうと思います。また、関連する見開きページで、学習マップがどちらも用意されていること。それから、目次の次にその学習マップがあるわけですけれども、そこに、歌うとか、聞くとか、様々な分類もなされているということで、内容構成ともに、非常によくできたテキストだというふうに思います。

詳細を確認してみると、例えば、琴の演奏についてのページがございますが、どちらも扱っているわけですが、比較してみると、例えば、手元をクローズアップして、その爪の形や当て方の違い、また、座り方などを通して、音楽表現の在り方が違うことなども非常に丁寧に説明しているというのが、教育芸術社になるかと思います。学習の内容、教材も適切であって、さらに丁寧なご説明によって、学習の進化、充実が見込めるのではないかというふうに思いましたので、第１位が教育芸術、また教育出版のほうもよくできたテキストでございますので、第２位として推薦させていただきます。

以上です。

○佐藤教育長　ありがとうございました。

髙森委員、お願いいたします。

○髙森委員　音楽科に関しては、まずは他教科同様に、音楽を学ぶ意義・目的が明記されているか、あるいは学習内容が概観できるコンテンツがあるかについて確認しました。ついで、音楽の分析、楽器の奏法、指揮法、楽譜記号の解説などの充実度、使用された楽曲・曲目のジャンル別バランスなども考慮しました。これらの分析を通して、私は、１位を教育芸術社、２位を教育出版といたします。

音楽を学習する意義・目的については、両者とも明記はありませんが、教育芸術社には、各学年冒頭目次の前に、教育出版は目次の後に、それぞれ見開きで「学習マップ」が用意され、年間を通した学習内容と意義を概観できる工夫がなされており、学びの見通しを立てることが可能になっています。

振り返り・まとめについては、教育出版は各学年の巻末に「音楽のもと　まとめ」というページがありますが、第４学年までと第５・６学年とでは内容が異なり、特に５・６年は一年間の学習を俯瞰した概念図にとどまっております。一方の教育芸術社には、各学年の巻末に一定の基準で整えられた「ふりかえりのページ」が用意され、こちらは個々の学習内容を集約した「まとめ」の機能をしっかりと有しています。更に、４年生以降に共通して教育芸術社の巻末には、リコーダーの運指表、楽譜記号の一覧、和音・音階の説明などもまとめられており、分からないことがあればすぐにアクセスでき、利便性が高まっています。

次に、楽器の演奏法について。小学生が音楽活動で頻繁に使用する鍵盤ハーモニカとリコーダーに焦点をあてて比較してみました。鍵盤ハーモニカでは、教育出版は１年生の３４～３９ページに見開きで、２年生も２２・２３ページと２６・２７ページに見開きで、一方の教育芸術社は１年生の３４・３５ページと３８・３９ページに見開きで、それぞれ同じような紙面構成で説明がなされていますが、教育出版・教育芸術社ともにほぼ実物大の鍵盤の画像を利用するなど直感的に理解できるつくりになっていると思います。

一方のリコーダーについては、教育出版は３年生の１８～２５ページの７ページ、教育芸術社は３年生の２０～２９ページの１０ページとなっており、教育芸術社のほうが必然的に情報量が多い印象があります。

最後に選曲のバリエーションについて。２者とも童謡、民謡、唱歌、交響曲、歌謡曲など幅広いジャンルから選曲がなされ、それぞれ学習のめあてに応じて配当されていることが理解できます。楽曲の傾向にも偏りは少なく、２者ともに新旧の曲目をバランスよく織り交ぜた編成になっています。児童たちが、教科書を手に取ったとき、作品に触れてみたい、感じてみたい、あるいは仲間と一緒に歌ってみたい、演奏してみたいというような、興味・関心をかき立てる楽曲が多く含まれていることは、学ぶ意欲に自ずと直結するのではないかと思います。

ただし、大きな違いは目次を比較するとわかります。たとえば、６年生の目次を比較すると、教育出版は「短調のひびき」「アンサンブルのみりょく」「せん律のひびき合い」「音楽の聞きどろこ」「豊かな表現」などといった抽象的・観念的表現で具体性に欠けるのに対して、教育芸術社は「歌声をひびかせて心をつなげよう」「いろいろな音のひびきを味わおう」「和音のひびきや音の重なりを感じ取ろう」「曲想の変化を楽しもう」「詩と音楽の関わりを味わおう」などのように、実に具体的にめあてが示されており、意識的に楽曲に向き合う姿勢を重視している点が、高く評価できると思います。

以上の分析から、私は、教育芸術社を１位、教育出版を２位としました。

以上です。

○佐藤教育長　ありがとうございました。

次に私ですが、音楽は、表現及び鑑賞の活動を通して、音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育てるとともに、音楽活動の基礎的な能力、豊かな情操を養う教科であると認

識しております。子供たちの豊かな心を育む上で、音楽の学習はとても大切な役割を果たしている教科であると言えます。

２者それぞれの内容について見てみましたが、歌唱、器楽、音楽づくりといった表現及び鑑賞に関する教材数は偏りなく掲載されております。本区台東区では、演劇鑑賞教室等の芸術的な行事を、魅力ある教育活動として実施していることもございますので、私はこの和楽器の音楽を含めた我が国の音楽に着目いたしました。

第6学年を例に申し上げますと、２者とも雅楽を取り上げております。教育芸術社については、さらに巻末の鑑賞資料として、能や狂言、歌舞伎などの日本の古典芸能を掲載しており、学びの深まりが期待できるかと思います。全体的にも、教育芸術社は、学びの連続性が意識された楽曲構成になっていると思います。また、系統的な指導につきましても、どちらの者も、「おもいだそう」や「かえるのマーク」を掲載して、これまでの学習のつながりを児童が意識できる構成になっておりますが、教育芸術社は、さらに巻末に学年の学習内容がまとめられており、大事な振り返りに用いることができると考えます。

以上の観点から、私は、１位、教育芸術社、２位、教育出版として推薦をさせていただきます。

以上となります。

神田委員、お願いいたします。

〇神田委員　音楽は表現と鑑賞などの活動を通して学習します。そして、学んだことを生かし、生活や社会の中で音楽を楽しみ、親しんでいく態度を育成することが大切です。そこで、音楽表現をするための理解や技能が身に付けられるか、音楽を味わって聴くことができるか、音楽を楽しむことができるかの視点で教科書を選びました。

音楽の教科書は、教育芸術社、教育出版の２者となっています。

両者ともに歌唱、創作、鑑賞がバランスよく配置されていると思います。

特に、教育芸術社は、「うたう」「きく」「つくる」を意識できる構成になっています。また、身に付ける学習内容が明確に示されていて主体的に学習ができるように工夫されています。

一方、教育出版では、学習のねらいを達成するための編曲がなされていて、ねらいに迫ることができるように工夫されています。

次に、リコーダーを始めて学習する第３学年に教科書を見てみました。

教育芸術社では、楽器の写真やイラスト、演奏している様子の写真などが使われ、解説も分かりやいと思います。「みつける」「考える」「つくる」「演奏する」などのマークで児童への注意を促しているので、児童が行っている活動の意味付けがしやすいです。教材数は教育出版の方がやや多くなっています。両者ともに系統的に学べるように教材の配置を工夫しています。

以上、どちらも優れた教科書ですが、第１位は教育芸術社、第２位は教育出版を推したいと思います。

○佐藤教育長　ありがとうございます。

浦井委員、お願いいたします。

○浦井委員　私は、第１位を教育芸術社、第２位を教育出版とさせていただきました。

音楽は、技能だけでなく、豊かな情操を培うことも目的としています。候補となった発行者は、どちらも子供たちが学習しやすいよう、さまざまな工夫がされていると思いました。ただ、コロナ禍の間にできなかったリコーダーの演奏や合唱などの活動もあり、教員のなかでもブランクがあったり未経験の場合があったりすることを考慮し、スキルのあるなしにかかわらず教えやすいことも大切かと考えました。

候補となった教育芸術社、教育出版ともにそれぞれの工夫があると感じましたが、教える側のスキルの差などを考慮すると、教材数が絞られ、より教えるべきものを厳選して、的確な位置に配置している教育芸術社の方が、教える側のスキルにかかわらず、指導しやすいのではないかと思いました。

また教育芸術社は、雅楽などにくわえ、そこから広げて日本の伝統的な音楽について学べるようになっています。さらに、全体的に流れを作る形で構成されており、系統立てて指導できるうえに、学年ごとの振り返りのページが分かりやすく、子どもたちが使いやすいのではないかという点でも良いと思いました。

「君が代」の取り扱いにつきましては、国歌を聞く時、歌う時のマナーなどについての記述があり、教科書展示会などでも「強制になるのではないか」というような懸念を抱く声があったとのことで、そういった意見も当然あるのではないかと思います。ただ、これにつきましては、教育芸術社の取り上げ方は、あくまでも「たがいの国歌を大切にしよう」ということで、ほかの国の国家にも敬意をはらおうという形となっており、帽子を取るなどの礼儀の一例を示しているもので、強制するものではなく問題はないと感じました。

したがって私は、第１位に教育芸術社、第２位に教育出版を推薦させていただきます。

以上です。

○佐藤教育長　ただいま、各委員から推薦する発行者についてご発言をいただきましたが、集計した結果について事務局に報告させます。

（集計）

○事務局　それではただいまの集計結果について申し上げます。

第１位に教育芸術社を推薦された方が５名、第２位に教育出版を推薦された方が５名。

以上でございます。

○佐藤教育長　ただいまの集計結果のとおり、１位に教育芸術社を挙げた方の数が５名と最も多く、過半数を超えております。

このことにより、音楽については、教育芸術社に仮決定させていただきたいと思いますが、このことにつきまして附帯意見等はございますでしょうか。

（なし）

○佐藤教育長　それでは、音楽については教育芸術社に仮決定させていただきたいと思い

ますが、これにご異議ございませんか。

（異議なし）

○佐藤教育長　ご異議ございませんので、音楽については教育芸術社に仮決定いたしました。

図画工作

○佐藤教育長　続きまして、図画工作についてご審議願います。発行者は２者となっております。

それでは、各委員から採択すべき発行者について、順位をつけてご発言お願いいたします。

髙森委員から時計回りの順にお願いいたします。

○髙森委員　図画工作科については、教科の特性上、学習の意義・目的について、どのように提示されているかが興味深いところで、この部分は価値観が固定化する説明になっていないか注意して比較しました。

また、各単元ごとに学習活動の目当てや見通しがしっかりと示されているか、既習事項が活かされた題材や活動内容がみられるか、図画工作科の教科書ならではの資料の視覚的効果・ビジュアル的要素が充実しているか、材料・用具の使い方の説明は適切かについて比較・検討しました。以上の視点から、私は、１位を開隆堂出版、２位を日本文教出版といたしました。

図画工作科を学習する意義・目的に関しては、開隆堂出版は、全学年すべての教科用図書見返しに「図画工作を学ぶみなさんへ」が設けられ、造形・絵・立体・工作・鑑賞の各テーマに対応した学習内容と活動がアイコンを駆使して紹介されています。紹介されている活動の種類も豊富で、導入部分に関しては６年間を通して一貫性をもつように意図的に編集されていることが読み取れます。

一方、日本文教出版は、第１・２学年は「ずがこうさくがはじまるよ」、第３・４学年以降では「図画工作をはじめよう」において感覚的な気づきにつなげるイメージが多用されています。やや漠然としてとらえどころがないように感じますが、価値観を押しつけることを避けつつ、児童の発見・気づきを促すような説明文という意味では、図画工作科という教科の特性に相応しいのかも知れません。ただし、各学年毎の具体的な学びにつながりにくい部分は否めないと感じました。

目当て・見通し・振り返り・片付けに関しては、開隆堂出版・日本文教出版ともに、各単元毎に用意されていて、特に振り返りについては、学習者のみならず授業者側にとっても有効ではないかと思います。

図版や写真の活用については、両者ともさほど差異は感じられず、どちらも学習者の感性・ひらめき・美意識・想像力を刺激する内容になっておりました。また、２者ともに、２次元コードを活用し、教科書に収録できなかった教材を補完する工夫もなされておりま

す。

材料・用具の使い方の説明については、開隆堂出版は「学びの資料」として、日本文教出版は「材料と用具のひきだし」の項目をたてて、それぞれ巻末にまとめられ、学年毎に段階を追って使用する主たる用具を紹介しています。両者の大きな違いは、開隆堂出版は、取扱説明書的な要素が強く、それぞれの用具の使い方、使用上の注意点や後片付けの仕方について詳細に説明されているのに対して、日本文教出版は、「かく」「切る・曲げる」「はる・つける」「写す」といった動作にともなう道具や材料の扱い方の説明になっており、それらによってどのような表現が得られるかについても、簡単に説明されているという特徴があります。

全体を通して、日本文教出版は、図画工作科という学びの特性を重視し、非言語脳つまり感性やイメージを司る右脳に働きかけることに軸足を置いて編集されているという印象で、言語に頼って価値観を固定化せず、イメージを膨らませる工夫が随所にみられました。一方の開隆堂出版は、言語脳、つまり意識に直結した処理を一手に引き受ける左脳にも同時に働きかける工夫がなされており、説明文をしっかりと位置づけ、言語とイメージのどちらか一方に偏らない編集を心がけているように感じました。

以上の考察から、私は、開隆堂出版を１位、日本文教出版を２位としました。

以上です。

○佐藤教育長　ありがとうございました。

私は、図画工作科は様々な作品を作ったり鑑賞したりする活動を通して、子供たちの感性を育み、楽しく豊かな生活を作り出す態度を養い、豊かな情操を培う教科であると認識しております。

２者それぞれの内容について見てみましたが、表現及び鑑賞に関する教材数は偏りなく掲載されております。

図画工作科では、児童が表したいことを自分で見つけたり、思いついたりすること、つまり、豊かな発想や構想につながる指導が重要でございます。様々な素材に意図的に出会わせること、児童が発想や構想を具体的な形に表現する際の、技能的な引き出しを増やすことが必要でございます。

例えば、クレヨンの使い方、木版画を例にして２者を比較いたしますと、開隆堂出版の記載は、クレヨンでは持ち方や使い方、表し方などを、木版画では文字の解説が入っているなどと、それぞれ、より丁寧に書かれている印象がございます。

また、２次元コードは２者とも掲載されておりますが、開隆堂出版が分かりやすい構成になっていると思います。また、振り返りに使用できるワークシートも入ってございます。

以上のことから、私は、開隆堂出版を１位、日本文教出版を２位と推薦をさせていただきます。

以上になります。

神田委員、お願いいたします。

○神田委員　図画工作は表現と鑑賞の活動が中心となる学習です。表現では創造的な表現方法を工夫させるために多くの質の高い作品や身近な児童の作品が多く掲載されていることが大切かと思います。また、発想を豊かにできるように、材料や用具の使い方、指導のヒントが掲載させているかなどを考えました。

また、鑑賞では児童の見方や考え方を深めることのできる作品を掲載しているかなどが重要になるかと思います。そして、創り出す喜びを味わい、感性を豊かにしていくことのできる情操教育につながるものであることが大切かと思います。このような視点で教科書を見ました。

私は１位に開隆堂出版を推したいと思います。

開隆堂出版は、学習のめあてが文字だけでなく、キャラクターの台詞でも示されています。また、見開きで紹介されている作品等には解説も含まれています。作品の数も多く、特に表現の作品の数が他者より多いです。活動を重視している教科書です。題材構成も造形遊び、絵、立体、工作、鑑賞などの活動がバランスよく配列されています。写真のサイズが大きく見やすいことも特徴です。

巻頭では、「図画工作を学ぶみなさんへ」が設けられ、マークの扱い方に触れ、折り込みのページでは、様々な活動が写真で紹介され、わくわく感を引き出す工夫がされています。２次元コードの動画で導入をスムーズにすることができます。巻末の「学びの資料」では、用具や材料を紹介し、その使い方にも触れています。「未来へつがなる図画工作」として中学校へのつながり、キャリア教育にもつがなるページが設けられています。「つながる造形」では、生活を豊かにする図画工作の役割を示しています。「みんなのギャラリー」高学年では、伝統的文化にも触れています。また、「小さな美術館」では、有名な画家の作品なども盛り込まれています。

様々な情報を丁寧な説明がある開隆堂出版のみを第１位に推したいと思います。

○佐藤教育長　ありがとうございました。

浦井委員、お願いいたします。

○浦井委員　図画工作は、子どもたちの創作力や表現能力を養うだけでなく、近年家庭内で子どもたちに刃物などを扱う経験をさせることが難しい場合も多くなったことから、様々な用具を取り扱う知識や経験を積む、重要な教科でもあると思います。

しかし、その一方で、図画工作は専科教員ではなく担任が教えることも考えると、どうしても教員のスキルの差が生まれてきかねません。したがって、それを補える、工作の手順などのわかりやすい教材であることが欠かせないと考えます。

そのような視点から、私は、開隆堂出版を第１位、日本文教出版を第２位とさせていただきました。

候補となった開隆堂出版、日本文教出版ともに２次元コードの記載はありますが、開隆堂出版の方が、より使いやすく感じました。また、開隆堂出版は、用具の使い方についても写真で詳しく示されており、一例を挙げますと、1年の最初のころに使うクレヨンの

使い方について、日本文教出版がクレヨンの使い方と絵の具の使い方を同じページで説明しているのに対し、開隆堂出版はクレヨンの使い方だけを絵の具と分けて丁寧に取り上げて説明しているなど、全体を通して大変丁寧で使いやすい教材だと感じました。また、開隆堂出版は、目次に作成途中や完成した作品が写真で入れられており、子供たちにとって、自分たちが何を学んでいくかの見通しも立てやすいと感じました。

さらに図画工作は、得意不得意や手先の器用さなどによって好き嫌いが分かれてしまう教科ですが、日本文教出版が一見して上手でオーソドックスな作品が例として多く示されているのに対し、開隆堂出版は様々な個性のある作品の例が示されており、子どもたちが自信をもって個性的な作品を作ることができるのではないかと考えました。作品の例は、多く示せば良いというわけではありませんが、なかなか発想が浮かばず、苦手意識を感じる子にとっても、いろいろな例が挙げられているのは良いのではないかと思いました。

このような点から私は、第1位を開隆堂出版、第２位を日本文教出版とさせていただきました。以上です。

○佐藤教育長　ありがとうございました。

垣内委員、お願いいたします。

○垣内委員　図画工作科につきましては、創造することの楽しさ、そして、思考・判断し表現するなどの造形的な創造活動の基礎的な能力を育むこと、さらには、美術文化に関心を持って、生涯にわたり主体的に関わっていく態度、こういったものが求められていると理解しております。特に、感性や想像力を豊かに働かせて思考判断し、表現したり、鑑賞したりする資質・能力を相互に関連させながら育成する。また、生活を美しく豊かにする造形や美術の働き、美術文化についての実感的な理解を深め、生活や社会と豊かに関わる態度を育成するということが、重要ではないかというふうに思っております。

今回、２者、比較をさせていただきました。以下に述べるとおり、私は第１位が日本文教出版、第２位に開隆堂出版を推薦したいと思います。

いずれのテキストも、教材の内容、それから道具の紹介などが適切になされていて、学習の目当ての重点項目がきちんと明記されているということ、それから、教材も豊富で十分あるということ、様々な学習活動の見通しが立てやすいような形で教材が配置されていること、特に「小さな美術館」ということで、自然の美術作品などの紹介をしていくといったようなことが、いずれも行われております。

また教科書のつくりとして、見開きで１題材になっているとか、２次元コードも使われているといったようなこともございますし、高学年において、伝統芸能関係の、伝統工芸の関係、あるいは平和教育と関連するようなページを設けており、それぞれ伝統工芸の江戸切子とかそういったものも、きちんと必要不可欠な情報は入っているというふうに理解しました。

開隆堂出版のほうが情報量が多いんですが、ほかの委員もおっしゃったように、より主体的で能動的な美術の能力、特にクリエイティブな活動につなげていくという観点からす

ると、日本文教出版のほうが、いろいろと考える、想像する余地を子供たちに与えていくんじゃないかというふうに思いました。美術は近年その範囲が非常に拡大し、多様化しつつあります。いろいろなものに美的な創造性というのが見出せるわけで、そういったものを柔軟に取り込んだ形で学ばせるということも重要かなと思いましたので、第１位が日本文教出版、第２位、開隆堂出版とさせていただきました。

以上です。

○佐藤教育長　ありがとうございました。

ただいま、各委員から推薦する発行者についてご発言をいただきましたが、集計した結果について事務局に報告をさせます。

（集計）

○事務局　それではただいまの集計結果について申し上げます。

第１位に開隆堂出版を推薦された方が４名、日本文教出版を推薦された方が１名、第２位に開隆堂出版を推薦された方が１名、日本文教出版を推薦された方が３名。

以上でございます。

○佐藤教育長　ただいまの集計結果のとおり、１位に開隆堂出版を挙げた方の数が４名と最も多く、過半数を超えております。

このことにより、図画工作については、開隆堂出版に仮決定させていただきたいと思いますが、このことについて附帯意見などございますでしょうか。

（なし）

○佐藤教育長　それでは、図画工作については開隆堂出版に仮決定させていただきたいと思いますが、これにご異議ございませんか。

（異議なし）

○佐藤教育長　ご異議ございませんので、図画工作については開隆堂出版に仮決定いたしました。

家庭

○佐藤教育長　続きまして、家庭についてご審議願います。発行者は２者となっております。

それでは、各委員から採択すべき発行者について、順位をつけてご発言願います。

まず、私から時計回りの順にお願いいたします。

家庭科は実践的・体験的な活動を通して、生活をよりよくしようと工夫する資質・能力を育成することを目標としている教科であると考えております。家庭科は、先ほど申し上げましたとおり、実践的・体験的な活動を通して、授業が展開されていることの多い教科でございますが、例えば、調理実習の技能、特に包丁においては、２者とも巻末に画像で大きく掲載されておりますが、東京書籍の方が画像を大きく見やすくなっております。また、２者とも２次元コードを読み取ることによる動画での説明がありますが、東京書籍の

方は、ひとつの動画自体が若干長いのですが、立ち方の説明が含まれており、字幕も付けることができるようになってございます。

同様に、製作実習の技能、例えば、針と糸で縫う方法、裁ちばさみで布を裁つ方法がそれぞれ掲載しておりますが、こちらも東京書籍の方が大きく掲載されており、見やすくなっております。それぞれの実習中にも、児童がその都度確認することが容易になるのではないかと考えました。

さらに、内容の取扱いについては、開隆堂出版では、例えば、単元の「整理・整とんで快適に」と、「クリーン作戦」を第５学年、第６学年でそれぞれの学年で扱うように配置してありますが、東京書籍では、「物を生かして住みやすく」の単元で、整理整頓の仕方や掃除の仕方が一つの単元にまとまっており、題材として第5学年で取り扱うように配置されております。

東京書籍のように、関連する内容を同一学年で取り扱うことにより、より効果的な学習とすることができると考えられます。

これらのことから、私は、１位、東京書籍、２位、開隆堂出版として推薦をさせていただきます。

以上となります。

神田委員、お願いいたします。

○神田委員　家庭は衣食住に関する理解とともに技術を身に付けることがねらいとなっています。そして、学習を通して課題解決を図り、よりよい家庭生活を実践する能力や態度を身に付けさせることが大切です。したがって、「①衣食住に関する内容が分かりやすく説明されているか②安全面の配慮なども含め、実習を通して技術を身に付けることができる内容か③課題解決を通して実践力や課題解決力を身に付けることができる内容か」について考えてみました。

東京書籍、開隆堂出版、両者ともに巻頭で、家庭科の学習のねらいや学習の進め方が掲載されています。実習に関しても写真やイラスト、図などで分かりやすく説明されています。

その中でも東京書籍は、巻頭に、「あなたの生活をよりよく変える」「生活を変えるチャンス」など、児童に意欲的に学習に取り組めるようなコピーで呼びかけています。実際に、６５ページの生活を変えるチャンス①で分かるように、学んだことを生かして自分の生活をどのように変えたいのか、実践の進め方がチェック表のように工夫され実践できるようになっています。まとめや発表の方法も例示されています。最後は評価・改善の方向性が課題例とともに示されています。全体的に資料が多く、説明が分かりやすいです。調理実習や裁縫の仕方などは写真やイラストを使って正確に安全に指導ができるようになっています。写真は小さめですが、鮮明で色彩も鮮やかです。写真の説明なども丁寧です。

開隆堂出版も資料や写真を活用し、丁寧に解説されています。イラストには、男女・人権など多様性を意識しており、左利きの児童にも対応されているところは評価されます。

以上のことを総合して考えますと、私は東京書籍を第１位に、第２位に開隆堂出版を推したいと思います。

○佐藤教育長　ありがとうございました。

浦井委員、お願いいたします。

○浦井委員　私は、第１位を東京書籍、第２位を開隆堂出版とさせていただきました。

家庭という教科も、図画工作と同じく、専科教員ではない担任も教えることを考えると、教員のスキルにかかわらず、教えやすい教材であることが大事ではないかと考えました。

開隆堂出版も、多様性にも配慮したイラストを使用するなど、いろいろな工夫がされており、また説明も詳しく読み応えのある教材となっております。ただ、限られた時間の中で、これらを消化するのは、教員にもそれなりのスキルが必要となり、少々大変ではないかと感じました。また、包丁などの道具の扱いについて、巻末に見開きページでわかりやすくまとめてあるのですが、見開き部分が使いにくいのと、すぐに折れるなど傷んでしまうのではないかと感じました。

東京書籍は、写真を用いた説明が大変わかりやすいと感じました。一例を挙げますと、それぞれ東京書籍の１１７ページ、開隆堂出版の６３ページと９２ページにある「消費期限」についてですが、東京書籍の方が、実際の食品表示の写真などを載せて説明しており、実際にスーパーなどに行ったときに食品を手にした時のイメージがわくようにしてあります。

また、東京書籍は、教科書の最初のページに「いつも気をつけよう」として、実習の前に気を付けるべきことや、地震の時はどうするかなど実習にあたっての注意点をまとめ、最後のページで「いつも確かめよう」として、包丁や針などの用具の扱いなどをまとめてあります。これは、実習への心構えや、安全への配慮の大切さが常に必要だと感じ取れるようになっていて、とても良いのではないかと思いました。

さらに、東京書籍の動画には字幕も付けられるようになっているとのことで、耳の不自由な子どもたちはもちろん、そうでない子どもたちにとっても、動画を一時停止し、字幕を出しておいて確認しながら実習することができるなど、使い方によって大変活用できるのではないかと考えました。

このような理由から、東京書籍を第１位、開隆堂出版を第２位とさせていただきました。以上です。

○佐藤教育長　ありがとうございました。

垣内委員、お願いいたします。

○垣内委員　家庭科につきましては、ほかの委員も、もう既にご指摘されているところですけれども、知識・技能だけでなく、思考力・判断力・表現力、そして、学びに向かう力・人間性の三つ、大きな能力が要求されると思います。生活の営みに関わる見方、考え方を働かせ、衣食住などに関する実践的・体験的な活動、生活をよりよくしようと工夫す

る資質・能力、ここに結びつけるというのが重要なポイントかと思います。この2者を比較させていただき、私は、第１位、東京書籍、第２位、開隆堂出版とさせていただきました。

いずれの教科書も、学習の目標とか流れといったようなことがきちんと明示されていて、また２次元コードなどの使用によって、非常に分かりやすく説明がなされていると思いました。単元の導入に問いかけがあるということで、主体的な学びにもつながるのではないかというふうに思います。さらに、５年生で学んだことが６年生で生かせるような目次の構成になっている点とか、また教材についても、過不足なく、十分に多くのたくさんのメニュー、そして内容を盛り込んでいるというふうに理解いたしました。

その上で両者比較いたしますと、ほかの委員もご指摘の点ですけれども、例えば、持続可能な社会へ、物やお金の使い方ということで、東京書籍の場合は、環境と買い物が一つの単元にまとめられているというようなこと。あるいは、「ものを生かして住みやすく」のところでは、整理整頓と掃除、こういう形で、様々な活動の関連性も理解できるような一つの例示になっているというような点、非常によくできているのではないかというふうに思いました。

さらに実践的な科目であることを考えると、やはり、具体的でかつ実用的である必要があると思います。この点も、何人かお話が、もうご指摘がありましたけれども、包丁とかの使い方、立ち位置などについても、より具体的かつ実践的に確認事項が記載されているだけではなくて、動画で見られると、実際の学び、子供たちが学ぶ、あるいはクラスルームで、そういったことを勉強するときにも、非常にはっきりと直截的に理解できるんではないかというふうに思いました。

いずれもよくできた教科書ですけれども、以上の理由で、第１位、東京書籍、第２位、開隆堂出版とさせていただきました。

以上です。

○佐藤教育長　ありがとうございました。

髙森委員、お願いいたします。

○髙森委員　人間が生きていく上で最も大切な基盤・土台となるものが、衣食住と健康であるとすれば、家庭科や体育科保健を学習する意義は、たいへん大きいものであると考えます。ここで学ぶ知識や経験は、学習者の生涯に亘って活かされるものであるからです。

本教科の比較・検討では、家庭科を学ぶ意義や各単元の動機づけが明示されているか、日常生活に直結しているか、道具の使い方や実習の手順などが合理的に説明されているか、安全面への配慮がなされているか、視覚から入る写真・図版の活用が適切かどうか、などに着眼しました。こうした分析を通して、私は、１位を東京書籍、２位を開隆堂出版と考えました。

家庭科を学ぶ意義や学習の進め方については、２者とも冒頭折り込み部分を含め５ページまたは７ページに亘って説明されており、教科の学習にあたり必要な情報がまとめられ

ております。

次に衛生面・安全面の配慮について、調理器具・裁縫用具・火気の取り扱い等も必然的に多くなる家庭科の実習では、料理や裁縫の技量以上に、使用する用具の利便性と危険性、使用法ならびに使用上の注意点などを学ぶことは、実習を安全かつ円滑に進めていく上で欠かせません。その点に着目した時、東京書籍は巻頭８～１１ページ・巻末１３６ページ以降に「いつも確かめよう」の特設ページが設けられ、加えて各単元毎の要所にも同様に「いつも確かめよう」の欄が設定され、実習上の確認事項や注意点が充実していることが読み取れます。一方の開隆堂出版は１４２・１４３ページの見開きに「安全と衛生に気をつけて実習しよう」のページが用意されておりますが、情報量としては東京書籍に及びません。なお２社とも、各単元には「安全」のアイコンが用いられ、全体を通して実習の安全が保たれる配慮はなされております。

学びを家庭に持ち帰って再現できるかについては、２者とも各単元の第３段階目のステップで意図的に家庭学習を促し、今後の生活に活かす工夫がされています。更に東京書籍では、６５・１２１・１３４ページにそれぞれ数ページに亘って「生活を変えるチャンス！」の取り組みを用意し、生活の課題と実践の具体例が示されている点で優れていると思います。開隆堂出版にも、３７・８０ページに「生活の課題と実践」についてのページが設けられておりますが、こちらも分量としては東京書籍に及びません。

以上の分析によって、私は東京書籍が１位、開隆堂出版が２位と考えます。

以上です。

○佐藤教育長　ありがとうございます。

ただいま、各委員から推薦する発行者についてご発言をいただきましたが、集計した結果について事務局に報告させます。

（集計）

○事務局　それではただいまの集計結果について申し上げます。

第１位に東京書籍を推薦された方が５名、第２位に開隆堂出版を推薦された方が５名。

以上でございます。

○佐藤教育長　ただいまの集計結果のとおり、１位に東京書籍を挙げた方の数が５名と最も多く、過半数を超えております。

このことにより、家庭については、東京書籍に仮決定させていただきたいと思いますが、このことにつきまして附帯意見等はございますでしょうか。

（なし）

○佐藤教育長　それでは、家庭については東京書籍に仮決定させていただきたいと思いますが、これにご異議ございませんか。

（異議なし）

○佐藤教育長　ご異議ございませんので、家庭については東京書籍に仮決定いたしました。

それでは、ここで１５分程度休憩といたします。

再開は１４時５５分にいたします。

（休憩・１４：４０～１４：５５）

○佐藤教育長　休憩前に引き続き、会議を再開いたします。

保健

○佐藤教育長　続いて、保健についてご審議願います。発行者は６者となっております。

それでは、各委員から採択すべき発行者について、順位をつけてご発言願います。

神田委員から時計回りの順番でお願いいたします。

○神田委員　保健の指導となると、心と体を一体と考え、生涯にわたって心身の健康を維持しながら、スポーツライフを実現していく能力を育成することが大切です。

教科書を選ぶ視点としまして、まず、「①何を学ぶのか、ねらいが明確になっているか、②課題解決に向けた学習活動の充実を図れるか、③生涯にわたって実践的な力をもつことを意識している内容か」といった点を考えました。

私は東京書籍、Gakkenの教科書が優れていると思います。

東京書籍は、巻頭で保健の学習で身に付ける力を示しています。その後、教科書の使い方が説明されています。

「気付く・見つける」、「調べる・解決する」「深める・伝える」「まとめる・生かす」という学習の流れが４ステップで示されており、学習が主体的に取り組めるように構成されています。単元の始まりを見てみると、左のページには学習の目標、左下には、SDGsの目標と２次元コード、他教科や他学年の学習とのつながりが示されています。右のページには学習の最初のステップ「気付く・見付ける」が、右上には学習の進め方が示されています。右下にはメモ欄が設けられています。紙面の工夫により学習での活用がしやすくなっています。考えを広げたり深めたりすることができる資料が巻末にも掲載されています。以上のような点が評価されます。

Gakkenも学習目標から考えたり調べたりする活動を通して深く考えることができる構成になっています。「振り返る」「例を挙げて話し合う」「学びを生かす」の３ステップで学習が進められているところが特徴かと思います。「振り返る」からスタートしているところや書き込みをするスペースが多く自分なりに考えを確かめながら学習を進めることができるのは評価できます。

以上のことを総合的に考えてみまして、私は第１位に東京書籍を、第２位にGakkenを推したいと思います。

○佐藤教育長　ありがとうございました。

浦井委員、お願いいたします。

○浦井委員　近年、子供たちの体の成長は非常に早く、一昔前には中学からと思われてい

た第二次性徴も、小学生高学年には多くの子供たちに現れてきます。思春期の時期も早まっており、精神的には幼いまま第二次性徴や思春期を迎える小学生も少なくありません。そうしたなか、保健の授業は、子どもたちが変わっていく己の心と体と向き合い、大人になっていくための正しい知識を身に着けるためにも、非常に重要であると思います。

候補となった教科書はそれぞれ工夫されており、大変悩みましたが、これから申し上げる理由で、私は第１位を東京書籍、第２位をGakken、第３位を大日本図書をとさせていただきました。

まず、東京書籍とGakkenは、教科書に書き込む形で考えさせるところが多く、使いやすいのではないかと感じました。Gakkenの方がさらに書き込める箇所は多く作られていますが、逆に多すぎるのも授業を進めるうえで負担になることもあるのではないかと考えました。

また、東京書籍は、己の身を守ることにつながるプライベートゾーンについての知識も、２次元コードを掲載するなどしてわかりやすく取り上げています。他にも、２次元コードを用いた説明が各所でされていますが、２次元コードを自分で活用できるようになる中高学年が対象なこともあり、必要な部分をより深く知るのに役立つのではないかと思いました。

振り返りについて、東京書籍は他の発行者と異なり、単元のみの振り返りで、章の振り返りは設けてありません。しかし、単元ごとの振り返りがしっかりしていることと、ページの構成がパターン化していて使いやすいことなどを考慮すれば、問題はないかと考えました。

さらに、東京書籍・Gakken・大日本図書につきましては、性自認や性的指向についても掲載し、性の多様性についても言及しており、これは今の時代に欠かせない重要な点であると思いました。

大日本図書も、先に述べたプライベートゾーンについて、犯罪被害にからめて説明しているところなど、やはり大変工夫されていると感じましたが、先に述べた点などを総合的に判断した結果、東京書籍やGakkenがより使いやすいと考え、第１位を東京書籍、第２位をGakken、第３位を大日本図書とさせていただきました。

以上です。

○佐藤教育長　ありがとうございました。

垣内委員、お願いいたします。

○垣内委員　ありがとうございます。

保健に関しましては、健康で安全な生活と、豊かなスポーツライフの実現を目指した教育の実現、充実というのが非常に重要と聞いております。その中で、今、ほかの委員からもご指摘がありましたように、低学年から様々な変化、それから生活習慣の乱れ、そのほか、就学前教育、あるいは義務教育としての中学校教育との円滑な接続を図る必要などがあるということもありますので、各学年の発達段階の特徴を考慮して、身近な生活における自己の健康課題に気づき、その課題解決に向けて自ら取り組み、健康な家庭や学校づく

りに貢献するということが、非常に重要になるかと思います。よりよく生きるという意味で、いわゆるウェルビーイングにつながる非常に重要な教科であろうと思います。

そうった観点から拝見させていただきましたが、結論から言うと、第１位は、私は、東京書籍、第２位が大日本図書とさせていただきたいと思います。

三つの重要なポイントがあるかというふうに思いました。まず第一に、保健学習、なぜこのウェルビーイングにつながる保健学習をしなければならないのかということを、十分理解させること。それから２点目として、課題解決に向けたつながりをもった学習ができるかどうか。３点目としては、プライベートゾーンを含め、そして、LGBTなどのいわゆる多様性をきちんと理解できるかというこの3点について、特に優れているというふうに考えたからです。内容構成とか、その学習の流れがきちんと示されているといったようなところはほかの教科書もありましたが、東京書籍の場合は、多くの情報、教材、そして２次元コードの利用なども非常に丁寧で、また、教材の配置も、とびらから、活動、まとめという構成で統一しているという、非常に分かりやすい構成になっております。

また、次に大日本図書ですけれども、こちらのほうはやはりプライベートゾーンについて、犯罪被害の防止という観点からも配慮されているという点を高く評価し、第１位が東京書籍、第２位が大日本図書とさせていただいたところです。

以上です。

○佐藤教育長　ありがとうございました。

髙森委員、お願いいたします。

○髙森委員　小学校で学ぶ教科の中で、家庭科とならび人間が生きていく上で最も必要な知識といえるのが、体育科保健の学習内容だと思います。健康は、すべての学びの基礎となります。また、学校生活と日常生活は直結するわけですから、学校での健全な教育環境を保つ上でも、家庭における児童の健康管理・生活習慣は意識すべき事柄であるといっても過言ではないでしょう。

したがって、体育科保健用の教科用図書の選定にあたっては、保健での学びの目的・意義がどのように記されているかを見るばかりでなく、全ての単元において常に日常生活に照らし合わせて考えさせる内容になっているかどうかに主眼を置いて比較いたしました。

同時に、個別的内容としては、特に、思春期・いじめなど心の成長と葛藤の記述は、小学生から中学生がまさに該当する世代となるので、今まさに学ぶべき項目として重視し、あわせて事故・防犯・防災などのリスク教育、医療・薬品による病の治療法など基礎的な知識を効率よく学習できる構成になっているかを確認しました。これらの分析を通して、私は、１位に東京書籍、２位にGakkenを推薦いたします。

体育科保健での学びの目的・意義については、両者とも大単元ならびに小単元のそれぞれの冒頭に明記されており、学習の目当てがはっきり分かるように工夫されております。ただし、学習の進め方については、２者には相違があって、Gakkenは、各単元がそれぞれ４ページで組まれ、「ふり返る」「くらべる」「調べる」などの活動を中心としたステッ

プ１が見開き１ページ、「話し合う」などの活動を中心としたステップ２、「生かす」などの活動を中心としたステップ３がそれぞれ１ページと、振り返りの占める割合が紙面の半数を占めてしまっているため、活動のバリエーションと広がりが少ないように感じます。これに対して東京書籍は、各単元がそれぞれ４ページで組まれるうち、「気づく・見つける」「調べる・解決する」「深める・伝える」「まとめる・生かす」の学習課題がいずれも１ページづつ割いて組まれています。ゆったりと学習課題を消化していく工夫がなされており、ゆとりのある紙面の中に、見やすく豊富な情報が盛り込まれている点に好感をもてます。

また、書き込みを行う記入欄は、ノートを別途用意せずに授業に専念できるという点では工夫されていますが、Gakkenは記入欄の占める割合が東京書籍よりも多いことが指摘できます。この点は意見が分かれるところだとは思いますが、記入欄に空欄が多くなることを気にするあまり、授業者も記入欄を埋めさせることに腐心するのではないかということ、また記入欄が多いほど学習者が記入するための時間をその都度確保しなければならないことなど、それによって単元の活動が制約される弊害となるのではないかと心配されるところであり、その点では、東京書籍は無理のない設定がなされていると感じました。

思春期特有の悩みや不安に対する単元学習では、Gakken・東京書籍ともに第４・第５学年において、様々な悩みや不安に対応できるようなストレスの解消法や相談の仕方などについて、丁寧にアドバイスがなされています。特にGakkenは、５・６年の２３ページにいじめに特化したページが設けられており、東京書籍にはないコンテンツとして特筆したいところです。そのほか、３・４年の男女の性差や性自認に関する項目など、両者ともに、多感な時代を過ごす子供たちにメッセージが届く内容になっており、課題意識をもって編集されていると思います。

リスク教育の部分では、たとえば５・６年生で交通事故防止を扱ったGakkenの３０ページ以降、東京書籍の２７ページ以降を比較してみますと、Gakkenは自動車教習所の教本のような構成で無駄のない的確な記述になっている一方で、東京書籍はより実際に即した具体的内容で考えさせる構成になっており、小学生には東京書籍のほうが馴染みやすいのではないかと思いました。また、事故・犯罪被害・災害時・緊急時の安全確保については、Gakken・東京書籍ともに３・４年巻末をご覧いただくとお分かりになりますように、３・４年生の段階から早々と学習させる点は高く評価できます。

特に目を引いたのは、５・６年の東京書籍３５ページに１ページを割いて安全マップ作りが解説されている点で、この部分はGakkenでは５・６年３９ページにおいて紙面の３分の１に軽く触れる程度にとどまるなど、安全マップづくりの教育的効果を過小評価している点が残念です。安全マップづくりは、単に地域の安全面での課題を認識するためだけにあるのではなく、児童たちがマップ作りの作業に取り組む過程で、ふだんの授業では発言量の少ない児童や勉強が苦手な児童も積極的に作業に加わることができる、あるいはマップ作成を通していじめや不登校の解消にもつながった事例があるなど、単元学習以外の部

分での教育的効果も期待されています。東京書籍がそのあたりを意識したかは分かりませんが、この部分は感心しています。

以上の分析を通して、私は、１位に東京書籍、２位にGakkenを推薦いたします。

以上です。

○佐藤教育長　ありがとうございました。

体育科においては、児童の心身ともに健全な発達を促すために、心と体を一体として捉えた授業が重要であるとされております。そこで、保健領域を学習することを通して、児童が生涯にわたって正しい健康情報を選択したり、健康に関する課題を適切に解決したりする力を育むことが大切であると考えております。

６者それぞれについて見ましたところ、全ての発行者において、教科書の使い方として、１単位時間の学習の進め方について示しております。毎時間の学習を通して課題を解決するための方法を理解し、活用することができるようになるものと考えます。

各単元の構成を比較いたしますと、Gakkenと東京書籍は、課題発見に向けた問題提示に１ページ、続く数ページで課題解決に向けた学習活動があり、最後の１ページで学習のまとめができるように構成されております。児童も主体的に学習を進めやすいのではないかと考えました。

さらに、東京書籍は「気づく・見つける」として、問題提示のページを独立させており、ページをめくらなければ学習課題や学習活動が見えないようにして、問題についてじっくりと考えられるように配慮してあると考えました。

また、東京書籍は、関連資料の２次元コードも６者の中で一番多く掲載されており、学習を広げたり、深めたりするのに役立つものと考えられます。

以上の観点から、私は、１位、東京書籍、２位、Gakkenとして推薦をいたします。

ただいま、各委員から推薦する発行者についてご発言をいただきました。集計した結果について事務局に報告させます。

（集計）

○事務局　それではただいまの集計結果について申し上げます。

第１位に東京書籍を推薦された方が５名、第２位に大日本図書を推薦された方が１名、Gakkenを推薦された方が４名、第３位に大日本図書を推薦された方が１名。

以上でございます。

○佐藤教育長　ただいまの集計結果のとおり、１位に東京書籍を挙げた方の数が５名と最も多く、過半数を超えております。

このことにより、保健については、東京書籍に仮決定させていただきたいと思いますが、このことにつきまして附帯意見などございますでしょうか。

（なし）

○佐藤教育長　それでは、保健については東京書籍に仮決定させていただきたいと思いますが、これにご異議ございませんか。

（異議なし）

○佐藤教育長　ご異議ございませんので、保健については東京書籍に仮決定いたしました。

英語

○佐藤教育長　続きまして、英語について、ご審議願います。発行者は６者となっております。

それでは、各委員から、採択すべき発行者について、順位をつけてご発言願います。

浦井委員から、時計回りの順にお願いいたします。

○浦井委員　英語は、学校以外で別に学んでいる子どもと、そうでない子どもの差が大きくついてしまう教科だと思います。したがって、さまざまな学習段階の子どもに同じ教科書で教えることになりますが、今回候補となった教科書を見るにあたっては、学校以外でまったく英語に触れる機会のなかった子どもが初めて手にし、その後学校のみで学んでいく教科書として、どのようなものが良いかと考えました。

そのうえで、私は第１位を東京書籍、第２位を光村図書とさせていただきました。候補となったどの発行者も、必要な単語や表現を身に着けさせるための工夫がされていると感じました。今回順位には挙げませんでしたが、三省堂も大変よくまとまっている教科書であると思いました。ただ、文字数の多さなどもあって、まだ英語に慣れているとはいいがたい子どもにとっては少し高度に感じ、苦手感が増してしまう子もいるのではないかと思いました。

東京書籍は、別冊となる「My Picture Dictionary」が学年を超えて活用できるほか、別冊として分けている分、教科書の重さが軽いことも良い点だと思います。日本語での説明が多く、日本語で書き込む部分が多い点は、評価が分かれると思いますが、私自身は自分の子供の経験なども含め、やはり説明部分は英語による曖昧な理解で終わらせず、わかりやすい日本語できちんと補われていることは大切だと考えました。また、書き込んで用いやすいという点は、４技能のうちの「書く」という技能を伸ばすうえでも良いかと思いました。

光村図書も、取り外せる絵辞典などがついており、ユニット終了後に書き込んで自分の学んだことを確認できるように工夫されているほか、中学への接続もスムーズにできるよう工夫されている点が良いと感じました。

したがって、東京書籍と光村図書は僅差ではありましたが、最終的により教えやすいのはどちらかと考え、第１位を東京書籍、第２位を光村図書とさせていただきました。

以上です。

○佐藤教育長　ありがとうございました。

垣内委員、お願いいたします。

○垣内委員　英語に関しましては、外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと・話すことの言語活動を通じて、コミュニケーション

を図る素地となる資質能力を育成するということになっております。具体的には、言語や文化に関する体験的な理解、とりわけ体験というところが非常に重要かと思います。２点目は、外国語で聞いたり話したりして自分の考えや気持ちを伝え合う、そういった素地をつくる。

３点目として、相手に配慮しながら、主体的にコミュニケーションを図る。この主体的であり、かつ、能動的であり、広がりのある能力、そういったものを育成するんだろうというふうに理解いたしました。

いずれの教科書も非常によくできておりますけれども、後に述べる理由から、私は、第１位が光村図書、第２位に三省堂を推薦したいというふうに思います。

本当にいずれの教科書も学習の流れが分かる、見通しをもって振り返りもでき、見通しをもって主体的に学べるような教材になっているというふうに思っております。

２次元コードもうまく使っていただいて、話す、それから聞く、そしてコミュニケーションをさらに取っていくという、発展的な学習ができるようになっておりますし、各単元の進め方についても非常にきちんと明確に書かれているというふうに思います。

また、音声も非常に重要ですが、歌とか、チャンツとか、様々なものが盛り込まれているのは、この全ての教科書に共通する点かと思いますが、光村図書の場合、特にいいと思ったのは、このイントロダクションというんでしょうかね、導入部分が非常にうまく構成されているというふうに思いました。音声に十分親しんだ後、話す活動を経て、書くという流れが非常に明確に分かること、そして、各単元について、最初と最後にゴールと振り返りを明示して、見通しをもって主体的に学べること、内容に関しても工夫が見られるように思いました。異文化理解とか、直近のオリンピック・パラリンピックなども踏まえつつ、登場人物を固定し、一貫した物語とするということで、より親しみやすく、外国語に近づきやすくなるのではないかというふうに思いました。

また、英語の物語がありまして、これは一貫したストーリー、流れに沿って英語を学んでいくという、非常に実践的かつ体得ができる、そういうものであろうというふうに思いましたので、第１位が光村図書です。

第２位、三省堂につきましては、非常によくできた教科書でして、特に中学校との接続というのもうまくいくのではないかというふうにも思いましたし、構造的にも非常によくできていると思いますけれども、英語に親しむという観点と、そういうコミュニケーションをとる土台としての言語学習とか、学びという観点からは光村図書のほうがよろしいかと思いました。

したがいまして、第１位、光村図書、第２位、三省堂とさせていただいております。

○佐藤教育長　ありがとうございました。

髙森委員、お願いいたします。

○髙森委員　科目「外国語科」種目「英語」について、小学英語は、従来の中学英語を前倒しにすることが目的ではなく、長いスパンで段階的に子供たちが英語に触れる機会を増

やし、かつ日常的に英語を活用する機会を保つことに主眼が置かれているものと認識しておりますので、中学英語のように、聞くこと・話すこと・読むこと・書くことを短期間に同時進行で進めていくことは念頭におかないほうがよいと感じています。いままでのやりかたを低年齢層に引き下げるだけの外国語教育は、必ずしもうまくいくとは思いません。

したがって、外国語科英語の教科用図書の選定には、リスニング、トークキングと、リーディング、ライティングの比重に気をつけながら、我々が母国語を習得するような階梯を経て、英語が自然に身につき、発音やイントネーションや文法事項が完璧ではなくとも、英語を自在に活用できる程度の能力を開発する工夫がなされているかどうか、そのことの実現のために教師の関わり方が合目的的に位置づけられているかどうかをイメージしながら、比較・検討を行いました。これらの分析を通して、私は、１位に東京書籍、２位に光村図書を推薦いたします。

まず「教室英語」について、東京書籍は、別冊「My Picture Dictionary」見返し見開きに２年間の学習で使う教室英語や対話の常套句が整理されています。一方、光村図書は第５・第６学年それぞれの巻末に、別冊として切り離せる付録「Picture Dictionary」が用意され、その１９ページに教室英語が設けられていますが、こちらは挨拶や返事程度の簡単な会話にとどまり、シチュエーション別のやりとりで使う表現が少ないという印象があります。用意された２次元コードも各事例の発音を聞けるだけのコンテンツとなっております。

見通しや振り返りの部分については、両者それぞれに特徴があり、東京書籍では、別冊「My Picture Dictionary」で「５年生」または「６年生の主な表現を確認しよう」において既習事項の確認が、光村図書では各学年冒頭で「５年生」または「６年生でできるようになること」において各学年の学びのガイダンスが提示されています。東京書籍が復習、光村図書が予習というスタンスなのは興味深いところです。

全体の構成と単元の進め方について、２者ともに、大単元を基軸に小単元が割り振られ、それら大単元ごとに一定のねらいが定められていて、小単元のシチュエーションが固定されている点が好ましいと思いました。たとえば、東京書籍の第５学年では、「自分のことを伝え合おう」「身近な地域のことを伝え合おう」「日本のことを紹介しよう」といった３本立ての大単元で構成され、それぞれの目当てに符合した小単元の活動が２から３Unitづつ展開します。同様に光村図書も、第５学年を例に挙げると、「自分のことを伝え合う」「身近な人のことを伝え合う」「ちいきのことを伝え合う」という大単元が設定されています。ただし中身をよく見てみると、「身近な人のことを伝え合う」の中のUnit６は、身近な人というよりは地域の紹介になっており、次の大単元「ちいきのことを伝え合う」に充てたほうが相応しいのではないかと思う節（ふし）もあり、学習活動が若干入り組んでいる印象を受けます。

次に、個別的視点で５年生と６年生から一例づつ取り上げて比較してみます。

まず、５年の道案内の活動については、東京書籍５年では「Unit５」の５０ページ以降

に、光村図書５年では「Unit６」の６８ページ以降に展開します。児童達が日常的に比較的多く遭遇するであろう道案内というシチュエーションの学習が、大きな単元の中にしっかりと位置づけられ、学習時間を確保していることが理解できます。このうち東京書籍は、道案内に特化された単元になっている一方で、光村図書は単に道案内ばかりでなく、室内の物のありかを尋ねる活動が織り込まれている点が異なります。また、東京書籍の別冊２７ページ、光村図書の第５学年別冊１６ページには、道案内で使用する直進・右左折などの用語や、物の場所を指定する前置詞の使い分けが図解で簡潔にまとめられている点は評価できます。

次に、６年生最後の将来の夢について話し合う活動を比較してみます。東京書籍は、大単元「思い出と夢を紹介しよう」を、２つの小単元に分けて「Unit７」で小学校の想い出を回想し、「Unit８」で将来カードを活用して夢を発表する活動を用意しています。あまり盛り込みすぎず、中学校への進学に夢が広がるよう配慮されていることが読み取れます。これに対して、光村図書は、大単元「将来のことを伝えよう」の「Unit７」で将来の夢を発表する活動が、「Unit８」で小学校生活を振り返る活動があり、順序が東京書籍と逆転しています。思考過程という点では東京書籍のほうが、自然な流れではないかと思ってしまいます。また、光村図書の「Unit７」では、「夢宣言」という活動の中で、中学校での部活動を具体的に選択する場面があり、まだ中学校生活に具体的なビジョンをもっていない小学６年の段階では難しいのではないか、といった点が心配です。

最後に、別冊の辞典類について、東京書籍は「My Picture Dictionary」で、光村図書は「Picture Dictionary」で、学習する語句の辞書がそれぞれイラスト入りで紹介され、また５・６年の各単元で使用した基本的表現がまとめられ、学習した言い回しをいつでも振り返り、活用できるという点で実用性が高いと思います。

全体的に、東京書籍は、大単元と小単元の構成が首尾一貫しており、また２年間の活動も一連の流れの中に組み込まれている点が高く評価できました。また、学習活動の内容に関しても、東京書籍は、英語に対する専門的知識や英会話の経験値の少ない教師でも無理なく活動が進められる内容になっている点も評価したいと思います。一方の光村図書は、どのページを開いてもコンテンツが充実しており、厚みのある学習活動をイメージできるのですが、それが逆に英語スキルが成熟していない教師への負担になるのではないかという気がしました。東京書籍の場合は、教師の側も、児童の表現力の広がり・深まり・高まりに寄り添うかたちで、目的にかなった働きかけができるよう工夫されていることなどもあり、これらの点をふまえ、私は、１位に東京書籍、２位に光村図書を推薦いたします。以上です。

〇佐藤教育長　ありがとうございました。

外国語は、学習指導要領によると、「外国語によるコミュニケーションにおける見方、考え方を働かせ、外国語による聞くこと、話すことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る素地となる資質能力を次のとおり育成することを目指す」と目標が示されてお

ります。

その「次のとおり」とは、「外国語の音声、基本的な表現に慣れ親しむようにする」、「自分の考えや気持ちなどを伝え合う力の素地を養う」、「主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う」などがございます。

児童の主体的に学習を取り組む態度の育成を目指した指導をすることを大切にしている教科であると認識しております。

６者それぞれを見ましたところ、英語の音声に十分に慣れ親しませる「歌・チャンツ」などは、どの発行者も取り入れられておりました。話すことには、「やりとり」と「発表」の2種類がございますが、三省堂と光村図書におきましては、他者と比較しますと、多く設定されており、コミュニケーションを図ることを重視している印象を受けたところでございます。

東京書籍には各ユニットに「Over the Horizon」として、世界に目を向けてコミュニケーションを図ることを目的とし、海外の映像を見ながら、言語の背景にある文化を知る活動が取り入れられております。

また、主体的に学習を取り組むことにつきましては、どの発行者もユニットを数段階に分けて、段階的に学習を進めることができるようになってございます。「まとめ」として、既習事項を用いて表現する活動も設定されておりますが、その中で、光村図書はUnit終了後に、自ら書き込む、「世界に一つだけのあなたのシート」（All About Me）があり、６年生での学習のはじめにも活用できますし、中学校での授業のはじめにも活用できるのではないかと考えました。

また、全ての単元のはじめに、学習の見通しやイメージを持たせるための動画が見られるようになっていますが、加えて、目次に、Unitで中心となる活動を示しており、見通しをもって活動できるようになっていると考えました。

以上のことから、私は１位、光村図書、２位、東京書籍、３位、三省堂として推薦をさせていただきます。

以上となります。

神田委員、お願いいたします。

〇神田委員　英語は、英語による「聞くこと、読むこと、話すこと、書くこと」の言語活動を通して、コミュニケーション能力を身に付けることにあります。

教科書を選び視点として、それらの言語活動がバランスよく配置されていることが大切です。「①授業の流れが見え、教師が指導しやすく、児童が学びやすい構成になっているか、②児童の主体的な学びを引き出す場面設定になっているか、③英語の時間で学習した内容が確実に定着し、確かな力となるか」が重要です。これからの英語の学習では身に付けた力を活用することができ、コミュニケーション能力を育成することが可能である教科書を選びたいと思います。

私は、光村図書、東京書籍が優れていると思います。両者とも各領域がバランスよく

配置されています。

光村図書は、「Unit」の構成になっています。「Hop→Step１→Step２→Jump」の順になっており、年間を通して同じ学び方になっています。そのことで教師も児童も学習の流れを理解しやすく、ゴールが見えるようになっています。

見開きの紙面の左ページは、インプットの活動、右のページがアウトプットの活動になっています。それぞれじっくりと取り組めそうです。

「聞く」「読む」「話す（やりとり）」「話す（発表）」「書く」の５つの領域のうち、重点的に取り扱う領域を教材ごとに設定し、アイコンで明示されています。児童にとって学習が明確になりますし、教師にとっては指導や評価に役立ちます。Unitの最後には「振り返ろう」の欄があり、児童が自己評価をすることができます。

主体的な学びを引き出す工夫として、アニメーション映像が効果的です。「ミニ・アニメーション」は導入の活用だけでなく、Unitの中でも設定されており、何度も見たり聞いたりすることで場面に応じた英語力を身に付けることができるようになっていました。「スモール・トーク」のきっかけになる「ミニ・アニメーション」を活用することで教師の準備が楽になりそうな点も魅力的です。

学習したことが定着するように、既習学習の活用場面が随所に設定されています。また、文字の学習はスモールステップで丁寧です。本体から外せる「Picture Dictionary」が各学年の巻末に用意され、取り外しもできます。絵辞典としても、出会った言葉の振り返りとしても活用できます。

巻頭の「レッツスタート　いつもたいせつ」では、話すときに心がけたい４つのポイントがあり、いつでも確認することができます。巻末には「All About Me」で年間の自分の学びが可視化できるようになっています。コミュニケーション能力を育てる様々な工夫がちりばめられています。

東京書籍も、全体のバランスや構成などを考えると優れた教科書であると思います。大判で見やすくなっています。情報量も多く盛り込まれています。伝えたいことを考え、記述する欄が設けられており、次の活動に繋がるように工夫されています。まとめることは大切ですが、やや書き込み部分が多く「書くこと」の負担があるように思います。

以上のことを考えて、第１位は光村図書、第２位は東京書籍を推したいと思います。

〇佐藤教育長　ありがとうございました。

ただいま各委員から、推薦する発行者について、ご発言をいただきましたが、集計した結果について、事務局に報告させます。

〇事務局　それでは、ただいまの集計結果について、申し上げます。１位に東京書籍を推薦された方が２名、光村図書を推薦された方が３名、２位に東京書籍を推薦された方が２名、光村図書を推薦された方が２名、三省堂を推薦された方が１名、第３位に三省堂を推薦された方が１名。

以上でございます。

○佐藤教育長　ただいまの集計結果のとおり、１位に光村図書を挙げた方の数が３名と最も多く、過半数を超えております。

　このことにより、英語については光村図書に仮決定させていただきたいと思いますが、このことについて附帯意見等ございますでしょうか。

（なし）

○佐藤教育長　それでは、英語については光村図書に仮決定させていただきたいと思いますが、これにご異議ございませんか。

（異議なし）

○佐藤教育長　ご異議ございませんので、英語については光村図書に仮決定いたしました。

道徳

○佐藤教育長　最後に、道徳について、ご審議願います。発行者は６者となっております。

　それでは、各委員から、採択すべき発行者について、順位をつけてご発言願います。

　垣内委員から、時計回りの順にお願いいたします。

○垣内委員　特別の教科道徳につきましては、よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解をもとに、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に捉え、自己の生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、そして実践意識と態度を育てるというものであります。この特別の教科が導入された経緯も踏まえますと、命の大切さ、そしていじめへの対応、さらには、現代的課題をどのように扱っているのか、こういう点から各者の教科書を確認させていただきました。

　いずれの教科書に関しましても、きちんとこの命の大切さ、いじめ対応、そして現代的な課題というものをバランスよく配置して、教材のユニット化、あるいは２次元コードの利用など、様々な工夫が見られております。いずれもよくできた教科書であろうかと思いますが、以下、述べる点から、私は第１位をGakken、第２位が日本文教出版とさせていただきました。

　Gakkenに関しましては、特に、命の教育、多様性、キャリア教育について、異なる内容項目でユニットが組まれていて、非常に多面的・多角的に捉えられるような工夫が他よりも明確に見えたというところがございます。

　命の大切さについても教材が豊富で、しかもバランスよく配置されているのではないかというふうに思いましたし、キャリア教育についても多面的に取り上げられているという点を高く評価いたしました。

　２点目といたしまして、学習の流れが、他に比べても非常に分かりやすいというふうに思います。目次やタイトルの下に命とかいじめ防止、多様性、情報モラルという現代的な課題やSDGsに関する教材のそれぞれのマークが示されています。また、目次とは別に、最終ページで、様々な教材がどの内容項目に属するのかといったようなことも分類されています、こういった観点から、理解もしやすいし、教える側の教員の方にも使いやすい教科

書ではないかというふうに思いました。

第２位の日本文教出版につきましては、特に各教材の最後に、「考えてみよう」、「見つめよう・生かそう」というコーナーがありまして、子供たちが登場人物などに自我投影して与える発問・質問、それから自己を振り返る質問などが示されておりまして、こういったことも主体的な学びにつながるでしょう。みずから考えて、どうやってその課題を解決しようかというところにつなげていくような、実践的な学習にもつながるのではないかというふうに思いました。

以上、第１位がGakken、第２位が日本文教出版となりました。

以上です。

○佐藤教育長　ありがとうございました。

髙森委員、お願いいたします。

○髙森委員　科目「特別の教科道徳」種目「道徳」については、次の４つの観点で比較・検討しました。

視点の第１は、道徳という教科の説明、道徳学習の意義、学習の進め方について的確な案内があるか否かについて比較・分析しました。

視点の第２は、使用された教材の種類について、創作・物語・童話などのフィクション系の教材と、実話・ドキュメンタリー・時事問題・歴史上の人物伝などのノンフィクション系の教材のバランスはどうか、ＡＢＣＤ視点別教材の配分、すなわち自分・他者・社会・自然界の各領域に偏りなく教材が配当されているかどうか、また全体を見通すことができる工夫がされているかどうかについて比較いたしました。

視点の第３は、今述べた第２の視点とは別の観点から各教材を分析し、道徳教材にありがちな努力・克服・達成・成功話などの美談ばかりではなく、失敗・挫折・苦悩・後悔の念・償いや反省など、時に後味の悪い印象すらも与える事柄を題材にした教材の有無・分量・内容について分析しました。

視点の第４は、区立小学校の単位時間４５分で年間３５週の授業時間として、各教材の分量は妥当か、全体の構成がバランスよく体系づけられているか、限られた授業時間内での学習の進め方、発問の具体例、話し合い・実演など活動の内容に無理がないかなどについて分析しました。

これらの分析を通して、私は、１位に日本文教出版、２位に東京書籍を推薦いたします。

視点の第１番目の道徳という教科の説明、道徳学習の意義、学習の進め方について、東京書籍は、表紙見返しに道徳の活動における具体的場面を想定した学習者向けメッセージが用意されておりますが、道徳という教科を定義する文言はありません。道徳の定義を画一化しないという意図のようなものが読み取れます。道徳学習の方法については、続く目次の後に２～３ページの分量で「道徳の時間を始めよう」が設けられ、「どんな学びをするのかな？」のページで、「気づく」「考える」「広げる・深める」の３つのステップを提示して学習の進め方を説明し、「ちょっと話し合ってみよう！」のページで、話し合い

活動の具体例を紹介しています。

一方、日本文教出版は、目次に続く２・３ページに「道徳のとびら」、４・５ページに「道徳の学び方」が用意され、導入部のガイダンスで道徳の学習で何を、どう学ぶのかが具体的に提示されます。道徳が「よりよく生きるために大切なこと」を学ぶ教科であると明確に意義づけ、基本的な学び方として「気づく」「考える・深める」「見つめる・生かす」という３つのステップを提示して学習の進め方を説明し、そのための具体的な方法として「話し合う」「演じる」「書く」の３つのメソッドを用いることが説明されています。特に最後の「書く」は、「自分の考えをまとめて書く」という活動内容となっており、これが別冊として用意された『道徳ノート』の活用につながるものと考えられます。日本文教出版は、道徳という教科の説明、道徳学習の意義、学習の進め方がそれぞれしっかりと整理され、位置づけられていることが見て取れます。

保護者向けメッセージとしては、東京書籍は教科書裏表紙の表４に道徳学習の意義と家庭教育との接続について各学年共通のメッセージが用意されております。一方、日本文教出版は、本編には保護者向けメッセージがない代わりに、別冊の『道徳ノート』裏表紙の表４に注目すべき説明文があります。この文章は、別冊ノートを家庭に持ち帰ることを前提とした意図的なメッセージとなっており、学校と家庭との連携の中で児童の成長の過程を捉えていくことの重要性を訴えています。『道徳ノート』を学校教育と家庭教育の連絡帳的橋渡役に据えた点は、実に工夫されていると思います。道徳教育は、元来、家庭や地域社会で営まれてきた側面が大きいわけで、その上に立って、学校における道徳教育の位置づけを模索し続けることが今後も求められていくものと思われます。

視点の第２番目、使用された教材の種類について、２者ともに教材の活用の仕方には独自性が見られます。前回検定を通過した本科目の教科用図書には、定番と位置づけられる教材が各者ともに用いられていたと記憶していますが、今回は、日本文教出版は定番教材が残っているものの、東京書籍は新たな教材開拓を行った感があります。現場の教員のこれまでの蓄積が、新しい教科書でも活かされ、またたとえ教科書会社が変わったとしても引き継げるという点では、日本文教出版は魅力的ではないかと思います。

次に、視点の第３番目の気持ちが晴れ晴れとする美談と深く考えさせられる重いテーマの比率については、低学年ほど前者のほうが多く、高学年になるに従って後者の内容のものが多くなってきます。難しいテーマを子供たちに突きつける道徳教育の真髄がこの部分にあると思いますので、あとは教員の力量が問われるところです。

視点４番目の活動の内容、すなわち振り返り・発問・記録・自己評価、話し合いや実演の中身については、共通に用いられる教材で比較することが必要となります。そこで日本文教出版第６学年「最後のおくり物」と「手品師」、東京書籍第５学年「最後のおくり物」・第６学年「手品師」とをそれぞれで比較しました。

比較の結果、日本文教出版は「考えてみよう」「見つめよう・生かそう」の投げかけがともに１件づつであるのに対して、東京書籍は「考えよう」の投げかけが２件、「つなが

る・広がる」１または２件と、若干、東京書籍のほうが活動の数が多いと感じました。ほかの単元においても概ね同様の内容になっております。東京書籍の方は、教員は時間配分に留意しなければなりませんが、日本文教出版の方は、無理なく限られた時間を有効に活用するよう工夫されていることがわかります。この部分は、ひとつの活動にじっくりと腰を据えて取り組むか、多くの活動を取り入れて様々な気付きにつなげるか、どちらを優先にすべきか悩ましいところですが、道徳という教科の特性上、前者のほうが学習の目指す目標に叶っているような気がします。

なお、日本文教出版の「手品師」においては、上記の活動のほかに「ぐっと深める」という実演の活動が用意されています。様々な登場人物になりきって当事者意識を持って考えさせる場面は、日本文教出版では「ぐっと深める」が各学年に数箇所、東京書籍では「演じて考えよう」の活動が各学年に１箇所、それぞれ設けられております。特に東京書籍の「演じて考えよう」は、各学年１ページを割いて、話し合ったり演じて考える際の具体的な態度・心構えについての説明が用意されている点が特徴的です。

以上、全体を通して、採用された教材や学習活動の中身については、両者ともに優劣をつけがたいところではありますが、学習の進め方が整理され系統立てられていること、活動の内容が時間的にゆとりをもって展開できる工夫がなされていることから、私は１位に日本文教出版、２位に東京書籍を推薦いたします。

以上です。

○佐藤教育長　ありがとうございました。

私は、特別の教科道徳では、よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的価値に関する理解に基づきまして、自分自身を見つめるということが大切であると認識しております。

６者いずれの教科書も、「命の大切さ」や「いじめの防止」、「現代的な課題」などについて、さまざまな工夫が見られました。「命の大切さ」に関しましては、全ての学年で継続的に取り組むことが大切だと考えております。さらに、情報モラルなど、現代的な課題についても、発達段階に応じて系統的に学ぶことは非常に重要であると考えます。

そうした中で、Gakkenは、「命の大切さ」に関して、直接的に関わる内容項目、生命の尊さを取り扱う教材が全学年で１８本、各学年３本を配置されており、「いじめの防止」や「現代的な課題」などに関する教材が年間を通じてバランスよく配置されております。

さらに他の委員もおっしゃられたとおり、命の教育、多様性、キャリア教育については、異なる内容項目でユニットが組まれており、多面的・多角的に考えられる工夫がされております。

また、日本文教出版は、いじめ防止をテーマとしたユニット「人との関わり」を学期に一回、年間三回、全学年で配置し、重点的に取り扱っております。

さらに「情報モラル」に関しては、全学年で情報モラルを扱った教材がコラム「心のベンチ」と組み合わせて掲載されており、発達段階に応じて系統的に活用できるようになっ

ております。

また、付属の道徳ノートについても、固定された発問の記載はなく、自由度が高いレイアウトになっており、主体的に学習が進めやすいのではないかと考えました。

以上のことから、私は、１位、Gakken、２位、日本文教出版として推薦をさせていただきます。

以上です。

神田委員、お願いします。

○神田委員　特別の教科　道徳は、人間としてよりよく生きるための基盤となる道徳性を養う教科です。自己の生き方について考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践的意欲と態度を育てることがねらいとなっています。

「自分自身に関すること、人との関わりに関すること、集団や社会と関わりに関すること、生命や自然、崇高なものと関割に関すること」の四つの内容項目を扱っています。教科書を選定する観点として、「①道徳のねらいに迫りやすい内容であるか、②四つの項目がバランスよく構成されているか③考え、議論する道徳を実現することができる内容か④いじめや情報モラル、ユニットなど」様々な工夫を基に考えました。

どの教科書もそれぞれに捨てがたい素晴らしい教材が含まれ、特別の教科　道徳の指導を意識した内容の工夫が感じられました。

私は、日本文教出版、東京書籍の２者に注目しました。

共に巻頭に道徳科で学ぶことの意義と学び方、テーマについて掲載しています。また、四つの項目がバランスよく盛り込まれています。

日本文教出版では、教材数が多く、特に人との関わりについての教材が充実しています。

巻頭の「道徳のとびら」で、よりよく生きるために道徳の学びが大切であることが示されています。

「道徳の学び方」では、「気づく」→「考える・深める」→「見つめる・生かす」の順に学ぶことで、よりよく生きることの大切さを示しています。その方法として、話し合いや体験、自分の考えを文章にしてまとめることをすすめています。各教材には「考えてみよう」「見つめよう・生かそう」として、発問例が示されています。他者と比べると少なく感じますが、教員が様々に工夫して発問を柔軟に考え、発することもできます。国語科的な読み取りになることも防ぐことができるのではないでしょうか。

考えを深めるための「ぐっと深める」では、友達と話し合ったり、ロールプレイをしたりすることの学び方が例を示して取り組みやすくなっています。また、「心のベンチ」のコーナーが教材とセットになって随所に設けられ、学習したことを他の教科などとつなげて考えを広げるために工夫がなされています。

現代的な課題（SDGsなど）も関連教材の全体のバランスもよく配置され、「心のベンチ」とも関連付けられています。巻末にも資料が掲載されています。

「命の大切さ」について各学年で年間を通して複数の教材が配置されています。特に、「いじめ」に関する教材は、ユニットにして学期に１回ずつ年間３回を全学年で配置し、重点的に取り扱っています。６年生では、３つの教材と「ぐっと深める」「心のベンチ」を設定して、児童に深い学びを引き出すために重点的に扱われています。いじめ防止は重要な課題なので、法律にも丁寧に触れられています。

東京書籍も、いじめ防止についてはユニットになっており、６年生では「法律ってなんだろう」という教材として扱われており、多面的にいじめについて考えることができるようになっています。年間の早い時期に取り上げていることも評価できます。

日本文教出版の特徴として、道徳ノートが別冊で付いています。本区では取り扱いに自由度がある現場では使いやすいと好評のようです。また、高森委員同様、家庭に持ち帰って保護者との連携を図ることができると思います。

入門期の扱いについても日本文教出版では、絵などを使って緩やかに文章のある教材に繋げる配慮が感じられました。

以上のことから、第１位に日本文教出版、第２位に東京書籍を推したいと思います。

〇佐藤教育長　ありがとうございました。

浦井委員、お願いいたします。

〇浦井委員　近年、コロナ禍により、人間関係を築く機会となる様々な活動が制限されたこともあり、子供たちの人間関係のスキル、とくに友達とのかかわりの中で起こる問題に対するスキルや、他者とのかかわりから自分を見つめる客観視などのスキルが足りていないと言われます。そのような点からも、生活の教科はもちろん、特別の教科である道徳は、よりいっそう重要な教科になっていると考えます。

そのうえで私は、第１位をGakken、第２位を日本文教出版とさせていただきました。

道徳の授業の中でも重視される「いのちの大切さ」、そして「いじめの防止」についてですが、いずれの発行者も全学年に配置し、繰り返し学べるよう工夫するなどされていました。ただ、その中でもGakkenは、全体の教材の配置がバランス良く、児童の発達の程度にも沿っており、より使いやすいのではないかと感じました。

またGakkenは、該当の学年で学ぶ漢字やカタカナすべてにふり仮名を付けることによって、漢字の学習進度にかかわらず、読みたい思ったときに先を読み進めることができるようになっております。同じ学年でも、精神的にさまざまな成長段階の子どもがおり、道徳という教科は特に、子どもたちが日常の中で知りたいと思う内容や必要とすることがあっても、それが教科書通り順番に出てくるとは限りません。そのような面でも、興味があれば自分で先を読み進められるよう配慮されているのは良い工夫なのではないかと感じました。

日本文教出版は、「道徳ノート」が別冊としてあることが特色であり、この「道徳ノート」には特定の発問を記載せず、子どもたちの発問や意見を自由にうながせるようになっております。こうした自由度の高い使い方ができるようになっていることも、大きな特

色であるように感じました。教える側のスキルがあれば、これは活用しやすいと感じましたが、「道徳ノート」は、基本的にワークシートのダウンロードと配布で補えること、さらに自由度が高く、記述スペースが多い分、このノートを書かせることが中心となってしまい、授業時間内にスムーズにこなすことが難しい場合もあるかと考えました。

子どもたちに考えさせ、話し合わせるなど、より理解を深め考察させる部分は、例として挙げられている発問の数が多いと、子どもたちの発言の邪魔になるなど支障があるということですが、これについてもGakkenと日本文教出版は比較的発問数が抑えられており、教える側のニーズにもあっているのではないかと感じました。

以上のような点を総合的に考えましたうえで、私は、Gakkenを第１位、日本文教出版を第２位とさせていただきました。以上です。

○佐藤教育長　ただいま、各委員から推薦する発行者について、ご発言をいただきましたが、集計した結果について、事務局より報告させます。

○事務局　それでは、ただいまの集計結果について申し上げます。

第１位に日本文教出版を推薦された方が２名、Gakkenを推薦された方が３名、第２位に東京書籍を推薦された方が２名、日本文教出版を推薦された方が３名となっております。

以上でございます。

○佐藤教育長　ただいまの集計結果のとおり、１位にGakkenを挙げた方の数が３名と最も多く、過半数を超えております。

このことにより、道徳については、Gakkenに仮決定させていただきたいと思いますが、このことにつきまして、付帯意見等がございますでしょうか。

（なし）

それでは、道徳については、Gakkenに仮決定をさせていただきたいと思いますが、これにご異議ございませんか。

（異議なし）

○佐藤教育長　ご異議ございませんので、道徳についてはGakkenに仮決定いたしました。

以上で、小学校教科用図書については、全ての教科について仮決定いたしました。

それでは、小学校教科用図書の仮決定した全ての発行者について、事務局から報告させます。

○事務局　それでは、小学校教科用図書について、仮決定した図書の発行者名並びに書名について、ご報告いたします。

国語。発行者名、光村図書、書名「国語」。

書写。発行者名、光村図書、書名「書写」。

社会。発行者名、東京書籍、書名「新編　新しい社会」。

地図。発行者名、帝国書院、書名「楽しく学ぶ　小学生の地図帳」。

算数。発行者名、東京書籍、書名「新編　新しい算数」。

理科。発行者名、大日本図書、書名「新版　たのしい理科」。

生活。発行者名、光村図書、書名「せいかつたんけんたい」。
音楽。発行者名、教育芸社者、書名「小学生の音楽」。
図画工作。発行者名、開隆堂出版、書名「図画工作」。
家庭。発行者名、東京書籍、書名「新編　新しい家庭」。
保健。発行者名、東京書籍、書名「新編　新しい保健」。
英語。発行者名、光村図書、書名「Here We Go!」。
道徳。発行者名、Gakken、書名「新版　みんなの道徳」。
報告は以上でございます。
○佐藤教育長　小学校教科用図書については、以上です。
次に、特別支援学級教科用図書についてご審議を願います。
それでは、指導課長、説明をお願いします。
○指導課長　令和６年度使用台東区立特別支援学級教科用図書の採択について、ご説明申し上げます。
恐れ入りますが、ただいま配付させていただいています資料をご覧ください。
内容につきましてはこれまでもご説明、重複することがあるかもしれませんが、ご了承いただければと思います。
特別支援学級におきましては、年度ごとの子供たちの障害の状況や学年の人数構成などに対応するため、教科用図書採択を毎年度行っております。特別支援学級では、本区が採択した教科書のほか、特別支援学校用文部科学省著作教科書、さらに学校教育法附則第9条により、検定教科書、文部科学省著作教科書以外の一般図書を教科用図書として使用することもできます。
本区におきましては、蔵前小学校、松葉小学校、金竜小学校、浅草中学校、柏葉中学校の５校に特別支援学級を設置しております。また、来年度東泉小学校に新たに設置いたします。教科用図書の選定にあたっては、各特別支援学級の教育目標に基づくとともに、どの教科書が児童生徒一人一人により適しているかということを考え、調査研究を行い、様式3として調査結果をご報告いただきました。
こちらについては、一覧にしたもの、及び東京都教育委員会による特別支援教育教科書調査研究資料を事前に送付させていただいたところです。
６校の教科用図書の選定結果についてでございますが、蔵前小学校、松葉小学校、金竜小学校、東泉小学校、浅草中学校は、通常の学級と同様の検定教科書を使用いたします。柏葉中学校におきましては、一般図書等を使用する予定でございます。
採択のご審議をいただきたく存じます。
説明は以上です。
○佐藤教育長　特別支援学級の教科用図書について、ご質問、ご意見などがありましたら、お願いいたします。
○神田委員　来年度設置予定の東泉小学校ですけれども、新しく特別支援学級ができる場

合、どのように教科書を選定しているのかを教えていただけたらと思います。
○指導課長　来年度から設置される東泉小学校につきましては、現時点での区内設置校と情報交換をしながら、在籍予定児童の障害の状況等も調査した上で選定作業を行っております。
○神田委員　分かりました。ありがとうございます。
○佐藤教育長　そのほか、ございますでしょうか
○髙森委員　同じ学校種にあるにもかかわらず、一般図書を使用する学校と検定教科書を使用する学校にわかれているのですけれども、これは何か問題はないのでしょうか。
○指導課長　実際の指導では、教科書を教えるのではなく、教師が補助教材を作成するなど工夫して指導を行っているために、一般図書、また教科書、どちらを選択して指導しても問題ないと考えております。
○髙森委員　ありがとうございます。分かりました。
○佐藤教育長　そのほか、ございますでしょうか。

（なし）

○佐藤教育長　それでは、特別支援学級の教科用図書について、説明のとおり仮決定することについてご異議ございませんか。

（異議なし）

○佐藤教育長　ご異議ございませんでしたので、以上のとおり仮決定いたしました。
　ただいま審議、及び仮決定した内容をもとに、事務局に議案を用意させます。議案の準備が整い次第、東京都台東区教育委員会会議規則第１０条第１項の規定に基づき、日程を変更し、議案審議に入らせていただきます。
　それでは、議案の準備が整うまでの間、２０分程度休憩といたします。

（休憩・１６：１０～１６：３０）

○佐藤教育長　休憩前に引き続き、会議を再開いたします。

〈日程第２　議案審議〉
第３５号議案
第３６号議案
○佐藤教育長　日程第２、議案審議に入ります。
　第３５号議案、及び第３６号議案を一括して議題といたします。
　議案の提案理由及び内容について、指導課長、説明をお願いします。
○指導課長　第３５号議案、令和６年度使用台東区立小学校教科用図書採択について、ご説明申し上げます。本議案は地方教育行政の組織及び運営に関する法律に基づき、提出するものでございます。恐れ入りますが、裏面をご覧ください。

表にございますとおり、先ほど仮決定されました発行者及び教科用図書の一覧となっております。

続いて、第３６号議案、令和６年度使用台東区立特別支援学級教科用図書採択について、ご説明申し上げます。

本議案は、地方教育行政の組織及び運営に関する法律に基づき、提出するものでございます。恐れ入りますが、別表をご覧ください。

小学校につきましては、小学校教科用図書と同じ検定教科書に仮決定されました。浅草中学校につきましては、通常の学級と同様の検定教科書に仮決定をされました。柏葉中学校につきましては、表にございます一般図書等について、仮決定されております。

よろしくご審議の上、ご採択いただきますようお願いいたします。

○佐藤教育長　本件について、ご審議願います。

よろしいでしょうか。

（なし）

○佐藤教育長　これより裁決いたします。第３５号議案及び第３６号議案については、いずれも原案どおり決定いたしたいと思います。これにご異議ございませんか。

（異議なし）

○佐藤教育長　ご異議ございませんので、原案どおり決定いたしました。

３　その他

○佐藤教育長　本日の日程は以上でございますが、その他全体を通して何かございますでしょうか。

（なし）

○佐藤教育長　以上をもって、本日予定されました議事日程は全て終了いたしました。これをもちまして、本日の定例会を閉じ、散会といたします。

午後４時３３分　閉会